

# 農薬評価書

# クロチアニジン

(第6版)

2014年10月

食品安全委員会

## 目次

	頁
○ 審議の経緯.....	3
○ 食品安全委員会委員名簿.....	5
○ 食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿.....	5
○ 要約.....	9
I. 評価対象農薬の概要.....	10
1. 用途.....	10
2. 有効成分の一般名.....	10
3. 化学名.....	10
4. 分子式.....	10
5. 分子量.....	10
6. 構造式.....	10
7. 開発の経緯.....	10
II. 安全性に係る試験の概要.....	11
1. 動物体内運命試験.....	11
(1) ラット①.....	11
(2) ラット②.....	13
(3) マウス.....	17
(4) ヤギ.....	18
(5) ニワトリ.....	20
2. 植物体内運命試験.....	21
(1) 稲.....	21
(2) トマト.....	23
(3) 茶.....	23
(4) りんご.....	24
(5) てんさい.....	24
(6) とうもろこし.....	25
3. 土壌中運命試験.....	25
(1) 湛水土壌中運命試験.....	25
(2) 畑地土壌中運命試験.....	25
(3) 土壌表面光分解試験.....	26
(4) 土壌吸着試験.....	26
(5) 土壌カラムリーチング試験.....	26
4. 水中運命試験.....	26
(1) 加水分解試験.....	26
(2) 水中光分解試験.....	27

5. 土壌残留試験	27
6. 作物等残留試験	28
(1) 作物残留試験	28
(2) 畜産物残留試験(泌乳牛)	28
(3) 乳汁移行試験	29
(4) 推定摂取量	29
7. 一般薬理試験	30
8. 急性毒性試験	31
(1) 急性毒性試験	31
(2) 急性神経毒性試験(ラット①)	32
(3) 急性神経毒性試験(ラット②)	33
9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験	33
10. 亜急性毒性試験	33
(1) 90日間亜急性毒性試験(ラット)	33
(2) 90日間亜急性毒性試験(イヌ)	34
(3) 90日間亜急性神経毒性試験(ラット)	34
11. 慢性毒性試験及び発がん性試験	35
(1) 1年間慢性毒性試験(イヌ)	35
(2) 2年間慢性毒性/発がん性併合試験(ラット)	36
(3) 18か月間発がん性試験(マウス)	37
12. 生殖発生毒性試験	38
(1) 2世代繁殖試験(ラット)	38
(2) 発生毒性試験(ラット)	39
(3) 発生毒性試験(ウサギ)	39
(4) 発達神経毒性試験(ラット)	40
13. 遺伝毒性試験	41
14. その他の試験	43
(1) 28日間亜急性毒性/免疫毒性試験(ラット)	43
(2) 発達免疫毒性試験(ラット)	44
(3) 児動物への影響検討試験①	45
(4) 児動物への影響検討試験②	45
Ⅲ. 食品健康影響評価	47
・別紙1: 代謝物/分解物略称	52
・別紙2: 検査値等略称	53
・別紙3: 作物残留試験成績	54
・別紙4: 推定摂取量	72
・参照	76

## <審議の経緯>

### －第1版関係－

- |       |     |     |  |
|-------|-----|-----|--|
| 2001年 | 12月 | 20日 | 初回農薬登録（非食用）  |
| 2002年 | 4月  | 24日 | 初回農薬登録（食用）   |
| 2004年 | 9月  | 27日 | 農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準値設定依頼（適用拡大：大豆、キャベツ等）                   |
| 2004年 | 10月 | 5日  | 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第1005002号）、関係書類の接受（参照1～57） |
| 2004年 | 10月 | 7日  | 第64回食品安全委員会（要請事項説明）  |
| 2004年 | 11月 | 2日  | 第19回農薬専門調査会  |
| 2004年 | 12月 | 2日  | 第72回食品安全委員会（報告）  |
| 2004年 | 12月 | 2日  | から12月29日まで 国民からの意見・情報の募集   |
| 2005年 | 1月  | 26日 | 農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告   |
| 2005年 | 1月  | 27日 | 第79回食品安全委員会（報告）<br>（同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照58）                           |
| 2005年 | 10月 | 25日 | 残留農薬基準告示（参照59）   |

### －第2版関係－

- |       |     |     |  |
|-------|-----|-----|--|
| 2005年 | 9月  | 20日 | 農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準値設定依頼（適用拡大：いちご、はくさい等）                        |
| 2005年 | 10月 | 4日  | 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第1004001号）、関係書類の接受（参照60～62）      |
| 2005年 | 10月 | 6日  | 第114回食品安全委員会（要請事項説明）   |
| 2005年 | 11月 | 29日 | 残留農薬基準告示（参照63）   |
| 2006年 | 7月  | 18日 | 厚生労働大臣から残留基準（暫定基準）設定に係る食品健康影響評価について追加要請（厚生労働省発食安第0718028号）、関係書類の接受（参照64） |
| 2006年 | 7月  | 20日 | 第153回食品安全委員会（要請事項説明）   |
| 2006年 | 9月  | 25日 | 第4回農薬専門調査会総合評価第二部会   |
| 2006年 | 10月 | 4日  | 第4回農薬専門調査会幹事会  |
| 2006年 | 10月 | 26日 | 第165回食品安全委員会（報告）   |
| 2006年 | 10月 | 26日 | から11月24日まで 国民からの意見・情報の募集   |
| 2006年 | 12月 | 5日  | 農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告   |
| 2006年 | 12月 | 7日  | 第170回食品安全委員会（報告）<br>（同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照65）                                |
| 2007年 | 5月  | 31日 | 残留農薬基準告示（参照66）   |

－ 第 3 版関係 －

2008 年	1 月	7 日	農林水産省から厚生労働省へチアメトキサムの残留基準値の改正に伴う残留基準見直し依頼
2008 年	1 月	11 日	厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第 0111003 号）、関係書類の接受（参照 67、68）
2008 年	1 月	17 日	第 222 回食品安全委員会（要請事項説明）
2008 年	2 月	15 日	第 35 回農薬専門調査会幹事会
2008 年	2 月	26 日	農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告
2008 年	2 月	28 日	第 228 回食品安全委員会（報告） （同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照 69）
2009 年	7 月	2 日	残留農薬基準告示（参照 70）

－ 第 4 版関係 －

2010 年	11 月	24 日	農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準値設定依頼（適用拡大：豆類（未成熟）、未成熟とうもろこし等）
2011 年	6 月	8 日	厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安 0608 第 2 号）、関係書類の接受（参照 71～98）
2011 年	6 月	16 日	第 386 回食品安全委員会（要請事項説明）
2012 年	2 月	10 日	第 80 回農薬専門調査会幹事会
2012 年	2 月	27 日	農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告
2012 年	3 月	1 日	第 421 回食品安全委員会（報告） （同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照 99）

－ 第 5 版関係 －

2013 年	7 月	12 日	農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び基準値設定依頼（適用拡大：稲、さとうきび等）
2013 年	11 月	11 日	厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安 1111 第 3 号）
2013 年	11 月	14 日	関係書類の接受（参照 100～102）
2013 年	11 月	18 日	第 494 回食品安全委員会（要請事項説明）
2014 年	1 月	20 日	第 500 回食品安全委員会（審議） （同日付け厚生労働大臣へ通知）（参照 103）

－ 第 6 版関係 －

2014 年	4 月	7 日	厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安 0407 第 1 号）、関係書
--------	-----	-----	--

類の接受（参照 104～107）

2014年	4月	15日	第511回食品安全委員会（要請事項説明）
2014年	5月	27日	第105回農薬専門調査会幹事会
2014年	6月	18日	第107回農薬専門調査会幹事会
2014年	7月	1日	第520回食品安全委員会（報告）
2014年	7月	2日	から7月31日まで 国民からの意見・情報の募集
2014年	9月	11日	第112回農薬専門調査会幹事会
2014年	9月	26日	農薬専門調査会座長から食品安全委員会委員長へ報告
2014年	10月	7日	第532回食品安全委員会（報告） （同日付け厚生労働大臣へ通知）

＜食品安全委員会委員名簿＞

(2006年6月30日まで)	(2006年12月20日まで)	(2009年6月30日まで)
寺田雅昭（委員長）	寺田雅昭（委員長）	見上 彪（委員長）
寺尾允男（委員長代理）	見上 彪（委員長代理）	小泉直子（委員長代理*）
小泉直子	小泉直子	長尾 拓
坂本元子	長尾 拓	野村一正
中村靖彦	野村一正	畑江敬子
本間清一	畑江敬子	廣瀬雅雄**
見上 彪	本間清一	本間清一

\*：2007年2月1日から

\*\*：2007年4月1日から

(2011年1月6日まで)	(2012年6月30日まで)	(2012年7月1日から)
小泉直子（委員長）	小泉直子（委員長）	熊谷 進（委員長）
見上 彪（委員長代理*）	熊谷 進（委員長代理*）	佐藤 洋（委員長代理）
長尾 拓	長尾 拓	山添 康（委員長代理）
野村一正	野村一正	三森国敏（委員長代理）
畑江敬子	畑江敬子	石井克枝
廣瀬雅雄	廣瀬雅雄	上安平冽子
村田容常	村田容常	村田容常

\*：2009年7月9日から

\*：2011年1月13日から

＜食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿＞

(2006年3月31日まで)

鈴木勝士（座長）	小澤正吾	出川雅邦
廣瀬雅雄（座長代理）	高木篤也	長尾哲二
石井康雄	武田明治	林 真

江馬 眞  
太田敏博

津田修治\*  
津田洋幸

平塚 明  
吉田 緑

\* : 2005年10月1日から

(2007年3月31日まで)

鈴木勝士 (座長)

廣瀬雅雄 (座長代理)

赤池昭紀

石井康雄

泉 啓介

上路雅子

臼井健二

江馬 眞

大澤貫寿

太田敏博

大谷 浩

小澤正吾

小林裕子

三枝順三

佐々木有

高木篤也

玉井郁巳

田村廣人

津田修治

津田洋幸

出川雅邦

長尾哲二

中澤憲一

納屋聖人

成瀬一郎

布柴達男

根岸友恵

林 眞

平塚 明

藤本成明

細川正清

松本清司

柳井徳磨

山崎浩史

山手丈至

與語靖洋

吉田 緑

若栗 忍

(2008年3月31日まで)

鈴木勝士 (座長)

林 眞 (座長代理\*)

赤池昭紀

石井康雄

泉 啓介

上路雅子

臼井健二

江馬 眞

大澤貫寿

太田敏博

大谷 浩

小澤正吾

小林裕子

三枝順三

佐々木有

代田眞理子\*\*\*\*

高木篤也

玉井郁巳

田村廣人

津田修治

津田洋幸

出川雅邦

長尾哲二

中澤憲一

納屋聖人

成瀬一郎\*\*\*

西川秋佳\*\*

布柴達男

根岸友恵

平塚 明

藤本成明

細川正清

松本清司

柳井徳磨

山崎浩史

山手丈至

與語靖洋

吉田 緑

若栗 忍

\* : 2007年4月11日から

\*\* : 2007年4月25日から

\*\*\* : 2007年6月30日まで

\*\*\*\* : 2007年7月1日から

(2010年3月31日まで)

鈴木勝士（座長）  
林 真（座長代理）  
相磯成敏  
赤池昭紀  
石井康雄  
泉 啓介  
今井田克己  
上路雅子  
臼井健二  
太田敏博  
大谷 浩  
小澤正吾  
川合是彰  
小林裕子  
三枝順三\*\*\*

佐々木有  
代田眞理子  
高木篤也  
玉井郁巳  
田村廣人  
津田修治  
津田洋幸  
長尾哲二  
中澤憲一\*  
永田 清  
納屋聖人  
西川秋佳  
布柴達男  
根岸友恵  
根本信雄

平塚 明  
藤本成明  
細川正清  
堀本政夫  
本間正充  
松本清司  
柳井徳磨  
山崎浩史  
山手丈至  
與語靖洋  
義澤克彦\*\*  
吉田 緑  
若栗 忍

\* : 2009年1月19日まで

\*\* : 2009年4月10日から

\*\*\* : 2009年4月28日から

(2012年3月31日まで)

納屋聖人（座長）  
林 真（座長代理）  
相磯成敏  
赤池昭紀  
浅野 哲\*\*  
石井康雄  
泉 啓介  
上路雅子  
臼井健二  
太田敏博  
小澤正吾  
川合是彰  
川口博明  
桑形麻樹子\*\*\*  
小林裕子  
三枝順三

佐々木有  
代田眞理子  
高木篤也  
玉井郁巳  
田村廣人  
津田修治  
津田洋幸  
長尾哲二  
永田 清  
長野嘉介\*  
西川秋佳  
布柴達男  
根岸友恵  
根本信雄  
八田稔久

平塚 明  
福井義浩  
藤本成明  
細川正清  
堀本政夫  
本間正充  
増村健一\*\*  
松本清司  
柳井徳磨  
山崎浩史  
山手丈至  
與語靖洋  
義澤克彦  
吉田 緑  
若栗 忍

\* : 2011年3月1日まで

\*\* : 2011年3月1日から

\*\*\* : 2011年6月23日から



(2014年4月1日から)

• 幹事会

西川秋佳 (座長)	小澤正吾	林 真
納屋聖人 (座長代理)	三枝順三	本間正充
赤池昭紀	代田眞理子	松本清司
浅野 哲	永田 清	與語靖洋
上路雅子	長野嘉介	吉田 緑

• 評価第一部会

上路雅子 (座長)	清家伸康	藤本成明
赤池昭紀 (座長代理)	林 真	堀本政夫
相磯成敏	平塚 明	山崎浩史
浅野 哲	福井義浩	若栗 忍
篠原厚子		

• 評価第二部会

吉田 緑 (座長)	腰岡政二	本間正充
松本清司 (座長代理)	佐藤 洋	根岸友恵
小澤正吾	杉原数美	山本雅子
川口博明	細川正清	吉田 充
桑形麻樹子		

• 評価第三部会

三枝順三 (座長)	高木篤也	中山真義
納屋聖人 (座長代理)	田村廣人	八田稔久
太田敏博	中島美紀	増村健一
小野 敦	永田 清	義澤克彦

• 評価第四部会

西川秋佳 (座長)	佐々木有	本多一郎
長野嘉介 (座長代理)	代田眞理子	森田 健
井上 薫	玉井郁巳	山手丈至
加藤美紀	中塚敏夫	與語靖洋

## 要 約

ネオニコチノイド系殺虫剤である「クロチアニジン」(CAS No. 210880-92-5)について、各種試験成績等を用いて食品健康影響評価を実施した。

評価に用いた試験成績は、動物体内運命(ラット、マウス、ヤギ及びニワトリ)、植物体内運命(稲、トマト等)、作物等残留、亜急性毒性(ラット及びイヌ)、亜急性神経毒性(ラット)、慢性毒性(イヌ)、慢性毒性/発がん性併合(ラット)、発がん性(マウス)、2世代繁殖(ラット)、発生毒性(ラット及びウサギ)、発達神経毒性試験(ラット)、遺伝毒性等の試験成績である。

各種毒性試験結果から、クロチアニジン投与による影響は、主に体重(増加抑制)に認められた。神経毒性、免疫毒性、発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性、発達神経毒性及び生体において問題となる遺伝毒性は認められなかった。

各種試験結果から、農産物及び畜産物中の暴露評価対象物質をクロチアニジン(親化合物のみ)と設定した。

各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた2年間慢性毒性/発がん性併合試験の9.7 mg/kg 体重/日であったことから、これを根拠として、安全係数100で除した0.097 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量(ADI)と設定した。

また、クロチアニジンの単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響に対する無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた急性神経毒性試験の60 mg/kg 体重であったことから、これを根拠として、安全係数100で除した0.6 mg/kg 体重を急性参照用量(ARfD)と設定した。

## I. 評価対象農薬の概要

### 1. 用途

殺虫剤

### 2. 有効成分の一般名

和名：クロチアニジン

英名：clothianidin (ISO 名)

### 3. 化学名

#### IUPAC

和名：(E)-1-(2-クロロ-1,3-チアゾール-5-イルメチル)-3-メチル-2-ニトログアニジン

英名：(E)-1-(2-chloro-1,3-thiazol-5-ylmethyl)-3-methyl-2-nitroguanidine

#### CAS (No. 210880-92-5)

和名：[C(E)]-N[(2-クロロ-5-チアゾリル)メチル]-N<sup>2</sup>メチル-N<sup>2</sup>ニトログアニジン

英名：[C(E)]-N[(2-chloro-5-thiazolyl)methyl]-N<sup>2</sup>methyl-N<sup>2</sup>nitroguanidine

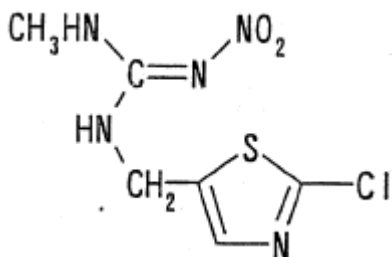
### 4. 分子式

C<sub>6</sub>H<sub>8</sub>ClN<sub>5</sub>O<sub>2</sub>S

### 5. 分子量

249.68

### 6. 構造式



### 7. 開発の経緯

クロチアニジンは1988年に武田薬品工業（株）により開発されたネオニコチノイド系殺虫剤であり、作用機構は昆虫中枢神経系のニコチン性アセチルコリン受容体に対するアゴニスト作用である。我が国では2002年4月24日に初めて食用作物についての農薬登録がなされた。海外では米国、韓国等で登録が取得されている。

今回、急性影響に関する食品健康影響について評価要請がなされている。

## II. 安全性に係る試験の概要

各種運命試験 [II. 1~4] はクロチアニジンのニトログアニジン部分の炭素を  $^{14}\text{C}$  で標識したもの（以下「[nit- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジン」という。）及びチアゾール環の 2 位の炭素を  $^{14}\text{C}$  で標識したもの（以下「[thi- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジン」という。）を用いて実施された。放射能濃度及び代謝物濃度は特に断りがない場合は比放射能（質量放射能）からクロチアニジンに換算した値（mg/kg 又は  $\mu\text{g/g}$ ）を示した。代謝物/分解物略称及び検査値等略称は別紙 1 及び 2 に示した。

### 1. 動物体内運命試験

#### (1) ラット①

Wistar ラット（一群雌雄各 3~5 匹）に[nit- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジン又は[thi- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジンを 5 mg/kg 体重（以下 [1. (1)] において「低用量」という。）又は 250 mg/kg 体重（以下 [1. (1)] において「高用量」という。）でそれぞれ単回経口投与、単回静脈内投与（低用量群のみ）又は反復経口投与（14 日非標識体投与後、標識体を投与：低用量群のみ）し、クロチアニジンの動物体内運命試験が実施された。

#### ①吸収

##### a. 血中濃度推移

血液中薬物動態学的パラメータは表 1 に示されている。

[nit- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジン又は[thi- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジンの単回投与時の  $C_{\max}$  は、低用量経口投与群では、投与 2 時間後に 1.86~2.36  $\mu\text{g/mL}$  となり、低用量静脈内投与群では投与直後に 4.90~5.62  $\mu\text{g/mL}$ （0.25 及び 0.5 時間の結果を直線回帰して算出した値）となった。 $T_{1/2}$  は、低用量経口投与群で 2.9~4.0 時間、低用量静脈内投与群で 1.8~2.4 時間であり、標識部位間に大きな違いはみられなかった。

表 1 血液中薬物動態学的パラメータ

パラメータ	[nit- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジン				[thi- $^{14}\text{C}$ ]クロチアニジン			
	5 mg/kg 体重				5 mg/kg 体重			
	雄		雌		雄		雌	
	経口	静脈内	経口	静脈内	経口	静脈内	経口	静脈内
$T_{\max}$ (hr)	2.0	0.0	2.0	0.0	2.0	0.0	2.0	0.0
$C_{\max}$ ( $\mu\text{g/mL}$ )	1.86	5.62	2.36	5.19	2.15	4.90	2.08	5.26
$T_{1/2}$ (hr)	3.8	2.4	2.9	1.8	4.0	2.2	3.8	1.9
$AUC_{0-48}$ ( $\mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ )	20.8	21.5	16.4	17.4	19.2	19.5	17.1	17.1

## b. 吸収率

両標識体を雌雄ラットに単回経口及び静脈内投与した時の投与後 48 時間までの血液中 AUC[=AUC(p.o.)/AUC(i.v.)]は 0.940~0.997 であったことから、経口投与された放射能の吸収率は 94.0~99.7% であると考えられた。

## ②分布

クロチアニジンの低用量及び高用量単回経口投与群の主な組織における残留放射能濃度は表 2 に示されている。

残留放射能は各組織とも経時的に減少し、投与 7 日後での各組織における放射能は、低用量群では 0.08 µg/g 以下 (0.07%TAR 以下)、高用量群では 0.86 µg/g 以下 (0.06%TAR 以下) であった。

表 2 主な組織における残留放射能濃度 (µg/g)

投与群	性別	2 時間後*	7 日後
5 mg/kg 体重 単回経口投与	雄	胃(7.17~9.98)、腎臓(5.69~6.83)、 肝臓(3.76~3.92)、副腎(2.69~2.80)、 心臓(2.13~2.36)、肺(2.10~2.20)、 血液(1.94~1.95)	体毛(0.02~0.08)、肝臓(0.02)、 血液(0.01~0.02)、腎臓(0.02 以下)
	雌	胃(7.96~11.2)、腎臓(5.04~5.65)、 肝臓(3.21~4.23)、副腎(1.88~2.94)、 心臓(1.86~2.60)、筋肉(1.82~2.33)、 血液(1.81~2.23)	血液(0.01)、肝臓(0.01)、 体毛(0.03 以下)、腎臓(0.02 以下)、 甲状腺(0.02 以下)
投与群	性別	7 日後	14 日後
250 mg/kg 体 重 単回経口投与	雄	肝臓(0.86~1.34)、血液(0.63~0.95)、 皮膚(0.62~0.64)、体毛(0.49~0.61)、 坐骨神経(0.53~0.55)、甲状腺(0.33~ 0.64)、腎臓(0.33~0.57)	体毛(0.48~0.58)、血液(0.36~ 0.53)、肝臓(0.28~0.38)、甲状腺 (0.21~0.25)、皮膚(0.17~0.24)、腎 臓(0.17~0.23)、坐骨神経(0.11~ 0.33)
	雌	体毛(0.61~0.63)、肝臓(0.59~0.67)、 血液(0.52~0.79)、副腎(0.41~ 0.59)、坐骨神経(0.22~0.62)	

\*: 血中最高濃度到達時付近

## ③代謝

低用量単回経口投与、低用量反復経口投与又は高用量単回経口投与において、尿試料からは、クロチアニジンが 61.4~79.6%TAR、代謝物 TZNG が 4.9~17.5%TAR、代謝物 MNG が 5.3~9.6%TAR、代謝物 MTCA が 4.9~9.8%TAR 検出され、その他の代謝物は 2.9%TAR 以下であった。糞中からはクロチアニジンが 1.2~5.7%TAR、代謝物 TMG が 1.5~3.6%TAR 検出され、その他の代謝物は 0.7%TAR 以下であった。

クロチアニジンの主要代謝経路は、①ニトログアニジノ基とチアゾリルメチル部分間の炭素-窒素結合の開裂 (MNG、NTG 及び MG)、②ニトログアニジノ

基の加水分解 (TZMU 及び TZU)、③*N*-脱メチル化 (TZNG、TZU 及び NTG)、④グルタチオンによるチアゾール環塩素の置換 (MTCA) であると考えられた。(参照 2~4)

#### ④排泄

投与後 7 日に、低用量単回経口投与群において、尿中に 92.0~95.8%TAR、糞中に 4.4~6.0%TAR、高用量投与群において、尿中に 90.6~93.4%TAR、糞中に 4.6~8.2%TAR が排泄された。反復経口投与群では、投与後 14 日間に、尿中に 92.3~95.5%TAR、糞中に 5.5~10.0%TAR が排泄された。投与放射能は主に尿中に排泄された。

### (2) ラット②

SD ラット (一群雌雄各 4 匹又は雄 4 匹) に [nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は [thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを 2.5 mg/kg 体重 (以下 [1. (2)] において低用量という。) 若しくは 250 mg/kg 体重 (以下 [1. (2)] において高用量という。) で単回経口投与又は反復経口投与 (非標識体を 14 日間投与後、[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを 25 mg/kg 体重で単回投与) し、クロチアニジンの動物体内運命試験が実施された。

また、SD ラット (一群雄 6 匹) に [nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを 5 mg/kg 体重で単回経口投与し、定量的全身オートラジオグラフィによる動物体内運命試験が実施された。

#### ①吸収

##### a. 血中濃度推移

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は [thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを低用量若しくは高用量で単回経口投与又は反復経口投与後の血漿中濃度推移が検討された。

血漿中薬物動態学的パラメータは表 3 に示されている。

血漿中放射能濃度は低用量群で経口投与 1.5 時間後に  $C_{max}$  に達し、速やかに吸収されることが示された。反復投与群の  $C_{max}$  は低用量群の約 10 倍であり、投与量とほぼ比例した値であった。血漿からの CL は低用量群及び反復投与群ともに高く、MRT は短かったことから、体内からの速やかな消失が示された。高用量群の血漿中濃度は、低用量群及び反復投与群と異なり、投与 1 時間から 32 時間後まで 45.6~79.5 µg/mL の高濃度で推移したが、48 時間後には 1.48 µg/mL、72 時間後には 0.36 µg/mL まで減少した。(参照 86)

表 3 血漿中薬物動態学的パラメータ

パラメータ	[nit- <sup>14</sup> C]クロチアニジン		[thi- <sup>14</sup> C]クロチアニジン	
	2.5 mg/kg 体重 単回経口投与群		反復経口 投与群	2.5 mg/kg 体重 単回経口投与群
	雄	雌	雄	雄
AUC (μg・hr/mL)	10.3	7.28	116	10.2
T <sub>1/2</sub> (α相) (hr)	1.20	1.49	1.89	0.882
T <sub>1/2</sub> (β相) (hr)	54.1	22.6	28.3	37.0
CL (mL/分)	4.05	5.73	3.59	4.08
T <sub>max</sub> (hr)	1.50	1.35	2.70	2.08
C <sub>max</sub> (μg/mL)	1.82	1.29	15.0	1.27
MRT (hr)	9.41	7.71	7.14	13.3
V <sub>ss</sub> (L)	1.42	1.90	0.929	2.25
腎排泄 (%TAR)	89.1	94.6	93.0	89.3

**b. 吸収率**

排泄試験[1. (2)④]より得られた経口投与後 72 時間の尿及びカーカス中の排泄率から、吸収率は少なくとも 89.2%と算出された。(参照 86)

**②分布**

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを 5 mg/kg 体重の用量で単回経口投与、[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン若しくは[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを低用量若しくは高用量で単回経口投与又は反復経口投与 72 時間後の体内分布試験が実施された。

主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 4 に示されている。

定量的全身オートラジオグラフィから求めた組織中放射能は、投与 1 時間後で全ての組織に分布し、その濃度は腎臓、肝臓、鼻腔粘膜及び膀胱を除いて血液中濃度以下であった。投与 24 時間後には組織中濃度は著しく低下し、48 及び 72 時間後にはさらに低下した。投与 72 時間後の組織中残留放射能濃度は、投与量、投与方法及び標識位置にかかわらず、肝臓及び腎臓で血漿と比較して高く、他の組織は血漿とほぼ同等又は低い濃度であった。(参照 86)

表 4 主要臓器及び組織における残留放射能濃度 (µg/g)

標識体	投与量	性別	1 時間	72 時間
[nit- <sup>14</sup> C] クロチア ニジン	5 mg/kg 体重# (単回経口投 与群)	雄	膀胱 (6.00)、鼻腔 粘膜 (5.64)、腎 (皮 質) (4.08)、腎 (全 体) (3.72)、肝 (3.42)、血液 (3.0)	鼻腔粘膜 (0.022)、肝 (0.021)、眼 (硝子体) (0.020)、副腎 (0.010)、 腎 (皮質) (0.008)、腎 (全 体) (0.006)、血液 (0.005)
	2.5 mg/kg 体重 (単回経口投 与群)	雄		肝 (0.0313)、腎 (0.0093)、 赤血球 (0.0056)、肺 (0.0042)、皮膚 (0.0035)、 血漿 (0.003)
		雌		肝 (0.0167)、腎 (0.0070)、 赤血球 (0.0044)、肺 (0.0037)、皮膚 (0.0034)、 消化管 (0.0031)、血漿 (0.0027)
	250 mg/kg 体 重 (単回経口投 与群)	雄		肝 (2.88)、腎 (0.864)、 赤血球 (0.789)、肺 (0.560)、 血漿 (0.361)
	25 mg/kg 体重/ 日 (反復経口投 与群)	雄		肝 (0.208)、腎 (0.0693)、 赤血球 (0.0537)、肺 (0.0400)、カーカス <sup>1</sup> (0.0267)、血漿 (0.0257)
[thi- <sup>14</sup> C] クロチア ニジン	2.5 mg/kg 体重 (単回経口投 与群)	雄		腎 (0.0380)、肝 (0.0329)、 消化管 (0.0234)、赤血球 (0.0119)、皮膚 (0.0104)、 肺 (0.0084)、血漿 (0.0079)

# : 定量的全身オートラジオグラフィ

### ③代謝

排泄試験 [1. (2) ④] で得られた尿及び糞を試料として、代謝物定量試験が実施された。

尿及び糞中代謝物は表 5 に示されている。

いずれの投与群もほぼ同様の代謝プロファイルを示し、尿及び糞を合わせた排泄物中の主要成分は未変化のクロチアニジンであった。尿中における主要代謝物は TZNG、MNG 及び MTCA であり、糞中では TMG であった。

クロチアニジンのラットにおける主要代謝経路は、酸化的脱メチル化による TZNG の生成並びにチアゾリルメチル基とニトロイミノ基の炭素-窒素結合の開裂に伴う MNG、NTG 及び CTCA の生成であり、CTCA はさらにグルタチオン抱合を受け MTCA にまで代謝されたと考えられた。(参照 86)

<sup>1</sup> 組織、臓器を取り除いた残渣のことをカーカスという (以下同じ。)



表 5 尿及び糞中代謝物 (%TAR)

標識体	投与量	性別	試料	クロチア ニジン	代謝物
[nit- <sup>14</sup> C] クロチア ニジン	2.5 mg/kg 体重 (単回経口投 与群)	雄	尿	54.7	MNG (13.2)、TZNG (11.3)、NTG (3.92)、TZU (0.52)、MG (0.45)
			糞	0.90	TMG (1.44)、TZG (0.36)、TZNG (0.14)、TZU (0.12)
		雌	尿	73.5	MNG (7.75)、TZNG (7.01)、NTG (1.42)、TZU (0.49)、MG (0.30)
			糞#	0.53	TMG (0.60)、TZG (0.19)、TZU (0.07)、TZNG (0.06)
	250 mg/kg 体 重 (単回経口投 与群)	雄	尿#	60.0	TZNG (12.5)、MNG (9.46)、NTG (3.49)、TZU (0.64)、MG (0.30)
	25 mg/kg 体重/ 日 (反復経口投 与群)	雄	尿	66.5	TZNG (10.2)、MNG (8.78)、NTG (1.92)、TZU (0.67)、MG (0.24)
[thi- <sup>14</sup> C] クロチア ニジン	2.5 mg/kg 体重 (単回経口投 与群)	雄	尿	59.8	TZNG (10.4)、MTCA (8.52)、ACT (1.02)、CTCA (0.89)、TZU (0.21)
			糞##	1.51	TMG (2.17)、TZG (0.54)、ACT (0.28)、TZU (0.20)、TZNG (0.18)

# : 投与後 48 時間、## : 投与後 72 時間、その他は投与後 24 時間

#### ④排泄

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを低用量又は高用量で単回経口投与若しくは反復経口投与後の尿及び糞中排泄試験が実施された。

投与後 72 時間の尿及び糞中排泄率は表 6 に示されている。

低用量群及び反復投与群では投与 24 時間以内に、高用量群では 48 時間以内に投与した放射能の大部分が排泄され、投与 72 時間後までに 95.4~99.6%TAR が排泄された。投与放射能は主に尿中に排泄された。体内残留放射能は僅かであった。尿中排泄には、標識位置及び投与方法による相違は認められなかったが、雄に比べ雌で若干尿中排泄率が高い傾向が認められた。(参照 86)

表 6 投与後 72 時間の尿及び糞中排泄率 (%TAR)

標識体	[nit- <sup>14</sup> C]クロチアニジン				[thi- <sup>14</sup> C]クロチアニジン
	2.5 mg/kg 体重 (単回経口投与群)		250 mg/kg 体重 (単回経 口投与群)	25 mg/kg 体重/日 (反 復経口投与 群)	2.5 mg/kg 体重 (単回経 口投与群)
性別	雄	雌	雄	雄	雄
尿	89.1	94.6	90.5	93.0	89.3
糞	6.27	3.29	8.58	6.60	7.79
カーカス	0.12	0.093	0.172	0.096	0.327

### (3) マウス

ICR マウス（一群雌雄各 3 又は 5 匹）に[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン を 5 mg/kg 体重の用量で単回経口投与し、クロチアニジンの動物体内運命試験が実施された。

#### ①吸収

排泄試験[1. (3)④]より得られた投与後 7 日間の尿中排泄率から、5 mg/kg 体重の用量でマウスに経口投与したクロチアニジンの吸収率は少なくとも 92.4% であると考えられた。（参照 87）

#### ②分布

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン を単回経口投与し、7 日後に体内分布試験が実施された。

残留放射能濃度は雌雄の肝臓、雄の副腎及び血液並びに雌の体毛において 0.02 µg/g であり、他の組織では 0.01 µg/g 未満であった。各組織中放射能の投与量に対する割合は 0.01～0.02% TAR 未満であり、残留放射能はごく僅かであった。（参照 87）

#### ③代謝

排泄試験[1. (3)④]で得られた尿及び糞を試料として、代謝物定量試験が実施された。

尿及び糞中主要代謝物は表 7 に示されている。

尿及び糞中の主成分は未変化のクロチアニジンであった。その他の代謝物として、尿中では TZNG、NTG 及び MNG が、糞中では TZNG、TMG、NTG 及び MNG が認められた。

クロチアニジンのマウスにおける主要代謝経路は、脱メチル化、ニトログアニジン部分及びチアゾリルメチル基の炭素-窒素結合の開裂並びに脱ニトロ化であった。（参照 87）

表 7 尿及び糞中主要代謝物 (%TAR)

性別	試料	クロチアニジン	代謝物
雄	尿	36.8	TZNG (29.2)、NTG (11.3)、MNG (8.7)
	糞	1.5	TZNG (1.3)、TMG (1.0)、NTG (0.4)、MNG (0.2)
雌	尿	38.3	TZNG (30.2)、NTG (10.7)、MNG (9.0)
	糞	1.4	TZNG (0.9)、TMG (0.8)、NTG (0.2)、MNG (0.2)

#### ④排泄

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを単回経口投与後 7 日の尿及び糞を採取し、排泄試験が実施された。

尿及び糞中排泄率は表 8 に示されている。

雌雄とも排泄は速やかであり、投与後 1 日以内に 94.5~95.3%TAR、投与後 7 日に 98.7~99.2%が体外に排泄された。投与放射能は主に尿中に排泄され、投与後 7 日に尿及び糞中にそれぞれ 92.4~93.7%TAR 及び 5.0~6.8%TAR が排泄された。(参照 87)

表 8 尿及び糞中排泄率 (%TAR)

経過日数 (日)	雄		雌	
	尿	糞	尿	糞
1	88.3	6.2	90.5	4.8
3	91.5	6.7	92.3	5.0
7	92.4	6.8	93.7	5.0

#### (4) ヤギ

Bunte Deutsche Edelziege 系泌乳ヤギ (1 頭) に[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン を 10 mg/kg 体重/日の用量で 3 日間反復経口投与し、動物体内運命試験が実施された。

##### ①吸収

###### a. 血中濃度推移

血漿中放射能濃度は初回投与 4 時間後に  $C_{max}$  (4.31  $\mu\text{g/mL}$ ) に達し、それ以降単相的に消失した。 $T_{1/2}$  は 5.3 時間、血漿中濃度 - 時間曲線により解析した MRT は 11.1 時間であった。(参照 89)

###### b. 吸収率

排泄試験 [1. (4)④] より得られた尿、乳汁中排泄及び組織中残留量から、ヤギに経口投与したクロチアニジンの吸収率は少なくとも 56.8% であると考えられた。(参照 89)

##### ②分布

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンの 3 日間反復投与 5 時間後 (初回投与 53 時間後) のと殺時に肝臓、腎臓、筋肉及び脂肪組織を摘出し、体内分布試験が実施された。主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 9 に示されている。残留放射能濃度は肝臓及び腎臓で比較的高かった。(参照 89)

表 9 主要臓器及び組織における残留放射能濃度

組織	組織中放射能濃度 (µg/g)
肝臓	16.5
腎臓	9.29
筋肉全体*	4.34
円回内筋	4.31
脇腹筋	4.54
腰筋	4.26
脂肪全体*	2.12
腎周囲脂肪	2.38
皮下脂肪	2.36
大網脂肪	1.82

\* : 3種の組織の平均値

### ③代謝

分布及び排泄試験[1. (4)②及び④]で得られた肝臓、腎臓、筋肉、脂肪及び乳汁を試料として、代謝物定量試験が実施された。

組織及び乳汁中代謝物は表 10 に示されている。

未変化のクロチアニジンは筋肉、脂肪及び乳汁で主成分として検出されたが、肝臓及び腎臓では検出されなかった。

クロチアニジンのヤギにおける主要代謝経路は、ニトロイミノ基の加水分解、脱メチル化、脱ニトロ化及びニトロ基の還元並びにそれに続くピルビン酸抱合化であり、そのほかにニトログアニジン部分及びチアゾリルメチル基の炭素-窒素結合の開裂であると考えられた。(参照 89)

表 10 組織及び乳汁中代謝物 (%TRR)

試料	クロチアニジン	代謝物
肝臓	-	TMG 抱合体 (14.8)、TMG (8.53)、TZU (7.48)、TZG (6.87)、TZNG (4.68)、TZMU (4.09)
腎臓	-	TZU (14.7)、TZG (12.1)、TZMU (11.3)、ATMG-Pyr (10.4)、TMG (9.54)
筋肉	25.0	TZU (13.0)、TZMU (9.60)、ATMG-Pyr (9.20)、TZG (8.97)、TZNG (5.87)、TMG (4.31)
脂肪	36.6	TZMU (12.6)、TZU (12.2)、ATMG-Pyr (6.76)、TZG (6.45)、TZNG (5.85)、TMG (4.53)
乳汁	51.2	TZNG (14.5)、TZU (10.6)、MNG (7.50)、TZMU (6.47)、TMHG (1.55)、TMG (1.27)

- : 検出せず

### ④排泄

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを初回、第 2 回投与後 24 時間及び第 3 回投与後 5 時

間（と殺時）に尿及び糞を採取した。乳汁は各回投与直前（午前）、投与約 8 時間後（午後）及びと殺直前に採取した。

尿、糞及び乳汁中累積排泄率は表 11 に示されている。

と殺時までには体外（尿、糞及び乳汁中）に排泄された放射能は 63.8%TAR であり、主に尿中に排泄された。（参照 89）

表 11 尿、糞及び乳汁中排泄率（%TAR）

初回投与後時間	尿及び洗浄液	糞	乳汁	組織中残留量
8			1.53	
24	62.3	12.6	1.95	
32			1.67	
48	64.7	18.3	1.86	
53	48.8	13.5	1.48	

a：累積投与放射能に対する累積排泄率

## (5) ニワトリ

### ①分布

ニワトリ（白色レグホン：一群雌 6 羽）に[ $\text{nit-}^{14}\text{C}$ ]クロチアニジンを 10 mg/kg 体重/日の用量で 3 日間反復経口投与し、初回投与 53 時間後にと殺し、主要臓器及び組織を摘出して体内分布試験が実施された。

表 12 に主要臓器及び組織における残留放射能濃度が示されている。

残留放射能濃度は腎臓及び肝臓で比較的高く、脂肪ではごく僅かであった。（参照 90）

表 12 主要臓器及び組織における残留放射能濃度

組織	組織中放射能濃度 (µg/g)
肝臓	5.15
腎臓	7.86
卵巣/卵管中の卵	1.84
脚筋	1.42
胸筋	1.74
皮膚（皮下脂肪を除く）	1.09
皮下脂肪	0.193

注：数値は 6 羽の平均値

### ②代謝

分布及び排泄試験[1. (5)②及び③]で得られた肝臓、筋肉、脂肪及び鶏卵を試料として、代謝物定量試験が実施された。

組織及び鶏卵中代謝物は表 13 に示されている。（参照 90）

表 13 組織及び鶏卵中代謝物 (%TRR)

試料	クロチアニジン	代謝物
肝臓	3.74	TZNG (46.0)、TZG (22.3)、TZU (2.00)、NTG* (1.61)、TMG (1.42)
筋肉	3.10	ATG-Ac (35.1)、TZNG (7.91)、TZG (5.78)、NTG* (3.09)
脂肪	5.30	ATG-Ac (31.3)、TZNG (23.7)、ATG-Pyr (7.13)
鶏卵	21.2	TZNG (87.5)、NTG* (3.78)、MNG* (1.31)、TZU (1.13)、尿素* (0.11)

\*: HPLC 分析における極性画分を TLC により分析

### ③排泄

分布試験[1. (5)①]に用いたニワトリの排泄物を、初回投与 24、48 時間後及びと殺時 (53 時間後) に採取した。また、鶏卵をと殺時まで採取するとともに、主要臓器をと殺時に採取した。

排泄物及び鶏卵における放射能回収率は表 14 に示されている。

と殺時までに排泄物中に排泄された放射能は 94.7%TAR であり、鶏卵中には 0.201%TAR が回収された。と殺時の組織に残留した放射能は 3.12%TAR と僅かであった。(参照 90)

表 14 排泄物及び鶏卵における放射能回収率 (%TAR)

投与後時間	排泄物	鶏卵
0~24	38.2	0.036
24~48	34.8	0.084
48~53	21.7	0.081
計 (0~53)	94.7	0.201

## 2. 植物体内運命試験

### (1) 稲

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを用いて、稲 (品種: 旭 4 号) における植物体内運命試験が実施された。本試験で用いた試験設計概要は表 15 に示されている。

表 15 稲における植物体内運命試験設計概要

試験区分	I	II	III
処理方法	葉部塗布処理		土壌混和处理
検体	稲の幼苗（播種後 1.5 か月）	稲体（出穂直後）	稲体（播種後 3 週間）
処理量	16%水溶液を葉部表面の中央に 2 µg 塗布処理	16%水溶液を葉部表面の中央に 15 µg 塗布処理	土壌に 1.5 µg/cm <sup>2</sup> の割合で混和、稲体を植えたポットの土壌表面に 300 µg の処理土壌を均一に積層
検体採取日	処理 7、14、21、28、35 日後	処理 48 日後	処理 30、60、130 日後

試験区 I において、処理 35 日後に 70.1～75.5%TAR が処理葉部に残存した。試験区 II においては、処理 48 日後に 84.8～91.0%TAR (40.5～47.3 mg/kg) が処理葉部に残存し、可食部（玄米）には 0.2%TAR (0.02 mg/kg) 存在した。試験区 III においては、処理 130 日後、稲体及び土壌中からそれぞれ 5.6～6.5%TAR 及び 88.0～91.9%TAR の残留放射能が回収され、葉部に 3.4～4.5%TAR、葉鞘部に 0.9～1.0%TAR 存在し、処理経過日数と共に増加した。可食部（玄米）への移行は 0.2%TAR (0.02 mg/kg) 以下と僅かであった。

試験区 I では、クロチアニジンは半減期 38～39 日の速度で減少し、35 日後クロチアニジンが 51.9～53.4%TAR、主要代謝物として TZNG、TZMU、MNG、TMG、MG、TZU 及び NTG が検出されたが、いずれも 5%TAR 以下であった。試験区 II では、処理葉、非処理葉、葉鞘、籾殻及び玄米にそれぞれ残留放射能が 40～47 mg/kg、0.03 mg/kg、0.01 mg/kg 未満、0.05～0.07 mg/kg 及び 0.02 mg/kg 検出された。各部での残留放射能の化学形態は、クロチアニジンが最も多く、それぞれ 81.3～82.7%TRR、40.0～49.1%TRR、41.1～42.8%TRR、38.3～47.1%TRR 及び 10.8～11.0%TRR が検出された。処理葉、非処理葉、葉鞘及び籾殻から主要代謝物として TZMU がそれぞれ 3.5～4.0%TRR、16.1～16.2%TRR、10.5～13.3%TRR 及び 9.2～12.1%TRR 検出された。玄米からは MG が 12.4%TRR 検出された。試験区 III では、玄米中の残留放射能の化学形態はクロチアニジン (12.7～15.5%TRR)、TZMU (6.3～13.3%TRR) 及び MG (7.1%TRR) であった。

その他の部位で検出された残留放射能は、籾殻では 0.07～0.17 mg/kg、検出された化合物は、クロチアニジン (26.8～39.6%TRR) 及び TZMU (14.4～17.1%TRR)、葉では 0.72～0.95 mg/kg、検出された化合物はクロチアニジン (10.0～16.3%TRR)、TZMU (15.3～15.7%TRR)、TMG (13.1～13.3%TRR) 及び MG (11.2%TRR)、葉鞘では 0.04～0.07 mg/kg、検出された化合物はクロチアニジン (19.5～22.5%TRR) 及び TZMU (14.4～16.9%TRR) であった。(参照 5)

## (2) トマト

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを用いて、トマト（品種：パティオ及び Bonset F1）における植物体内運命試験が実施された。本試験で用いた試験設計概要は表 16 に示されている。

表 16 トマトにおける植物体内運命試験設計概要

試験区分	I	II	III	IV
処理方法	葉部塗布処理	果実部塗布処理	散布処理	植穴処理
処理量	2.5 µg	10 µg	7.9 mg/株	15 mg/株
標識体	[nit- <sup>14</sup> C]クロチアニジン、 [thi- <sup>14</sup> C]クロチアニジン		[nit- <sup>14</sup> C]クロチアニジン	
検体採取日	処理 7、14、21、28 日後		採取前 17、3 日 の 2 回処理	処理 97 日後
試料	葉	果実	果実	果実

試験区 I において、処理 28 日後には 95.4～95.6% TAR が葉に残存し、その葉部内への移行量は 5.9～7.8% TAR と僅かであった。試験区 II において、処理 28 日後に 97.8～98.6% TAR が果実表面に残存し、果実部内への移行量は 6.8～8.7% TAR と僅かであった。試験区 III において、収穫時に 96.8% TRR が果実表面に残存し、果実部内への移行量は 3.2% TRR であった。試験区 IV において、処理 97 日後の果実部内には 0.014 mg/kg (0.3% TAR) が移行した。

試験区 I 及び II において、クロチアニジンの半減期はそれぞれ 132 及び 158 日であった。処理 28 日後、クロチアニジンはそれぞれ 86.8 及び 90.0% TAR であり、主要代謝物は、TZMU で 1.2～3.5% TAR であった。試験区 III のトマトにおいて、収穫時にクロチアニジンは 0.55 mg/kg (96.6% TRR) が果実表面に残存し、果実内部への移行量は 3.2% TAR と僅かであった。試験区 IV において、処理 97 日後、果実部にはクロチアニジンが 0.009 mg/kg (66.1% TRR) 存在し、代謝物としては MNG 及び TZNG が、それぞれ 0.002 mg/kg (17.7% TRR) 及び 0.001 mg/kg (8.4% TRR) 残存した。（参照 6）

## (3) 茶

茶（品種：やぶきた）の葉部に、[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンの水溶剤を処理葉部移行試験では 3.5 µg/葉を塗布し、処理 7、14、21 及び 28 日後に検体を採取し、非処理葉部移行試験では 50 µg/葉を塗布し（[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンのみ）、処理 28 日後に検体（処理葉、その上位/下位の非処理葉及び枝）を採取した。

処理葉部移行試験では、処理 28 日後に葉面上及び葉部内にそれぞれ 88.7～90.7% TAR 及び 5.2～8.3% TAR 分布した。非処理葉部移行試験では、処理葉部



に 97.0%TAR が認められ、非処理葉部及び枝部中への分布は 0.1%TAR 以下であった。

茶の葉部でのクロチアニジンの半減期は 140 日以上であった。放射能の大部分はクロチアニジン (88.2~90.5%TAR (12.4~13.2 mg/kg)) であり、代謝物は 2.4%TAR (0.33 mg/kg) 以下であった。(参照 7)

#### (4) りんご

りんご (品種 : James Grieve) の木に[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを 8.3 mg ai/木の処理量にて収穫 99 日前 (生理落果期) 及び収穫 2 週間前 (85 日間隔で 2 回) に散布し、最終散布 14 日後の成熟時に果実及び葉を採取して植物体内運命試験が実施された。

果実及び葉における残留放射能濃度はそれぞれ 0.076 及び 6.45 mg/kg であり、表面洗浄液及び抽出液にそれぞれ 33.3~70.1%TRR 及び 24.3~63.1%TRR 認められた。

果実及び葉における主要残留物は未変化のクロチアニジンであり、それぞれ 61.5%TRR (0.046 mg/kg) 及び 54.5%TRR (3.51 mg/kg) であった。果実中の主要代謝物は TZMU (10.6%TRR (0.009 mg/kg)) であり、微量代謝物として TZNG、THMN 及びそのグルコース抱合体が同定された。葉においては TZMU 及び THMN のグルコース抱合体並びに TMG 等 8 種の代謝物が同定されたが、その生成量は 7.2%TRR 以下であった。(参照 91、92)

#### (5) てんさい

てんさい (品種 : Madison) の種子に[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを 190 g ai/ha の処理量で混和し、処理 48 日、55 日 (6~8 葉期) 及び 144 日後に根部及び葉部を採取して植物体内運命試験が実施された。

根部における残留放射能濃度は、処理 48 日及び 144 日後にそれぞれ 0.860 mg/kg 及び 0.034 mg/kg であった。大部分の放射能 (86.9~98.4%TRR) は抽出画分に存在し、抽出残渣中の残留放射能は処理 144 日後に 13.1%TRR であった。葉における残留放射能濃度は処理 48 日及び 144 日後にそれぞれ 1.75 mg/kg 及び 0.886 mg/kg で、大部分 (93.3~98.9%TRR) が抽出画分に存在した。

根における主な残留物は未変化のクロチアニジンであり、処理 48、55 及び 144 日後にそれぞれ 50.0、67.9 及び 24.4%TRR (0.008~0.430 mg/kg) であった。処理 144 日後には代謝物として TZNG、MG、TMG、MNG 及び TZMU が同定されたが、いずれも 9.8%TRR (0.003 mg/kg) 以下であった。葉において未変化のクロチアニジンは処理 48 及び 55 日後にそれぞれ 49.3 及び 60.5%TRR (0.316~0.863 mg/kg) であったが、処理 144 日後には 4.3%TRR (0.038 mg/kg) まで減少した。処理 144 日後の主要代謝物は MG (28.6%TRR) 及び TMG (27.0%TRR) であり、ほかに 5 種の微量代謝物が同定された。(参照 93)

## (6) とうもろこし

とうもろこし（品種：Facet）種子に[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンをそれぞれ 1.06 mg ai/種子及び 2.52 mg ai/種子で添加し、処理 60 日後（[nit-<sup>14</sup>C]処理区）又は処理 63 日後（[thi-<sup>14</sup>C]処理区）に青刈り試料を採取し、処理 145 日後（[nit-<sup>14</sup>C]処理区）又は処理 160 日後（[thi-<sup>14</sup>C]処理区）に茎葉部及び穀粒を採取して植物体内運命試験が実施された。

青刈り試料、茎葉部及び穀粒における残留放射能濃度は、それぞれ 0.130～0.89 mg/kg、0.170～3.06 mg/kg 及び 0.006～0.063 mg/kg であった。大部分の放射能は抽出画分に存在し、抽出残渣中の放射エネルギーは 3.2～11.9%TRR であった。

青刈り試料、茎葉部及び穀粒における主要残留物は未変化のクロチアニジンであり、それぞれ 42.9～64.5%TRR (0.056～0.57 mg/kg)、20.1～39.5%TRR (0.034～1.21 mg/kg) 及び 14.4～58.5%TRR (0.001～0.037 mg/kg) であった。10%TRR 以上検出された代謝物は、MG（茎葉部：14.8%TRR (0.025 mg/kg)、穀粒：21.7%TRR (0.001 mg/kg)）のみであり、そのほか TMG、TZMU、MNG 等 7 種の微量代謝物が同定された。（参照 94、95）

作物における主要代謝経路は、メチルニトログアニジン部分の脱ニトロ化及び脱メチル化、ニトロイミノ基の加水分解並びにニトログアニジノ基及びチアゾリルメチル部分の炭素-窒素結合の開裂であると考えられた。

## 3. 土壌中運命試験

### (1) 湛水土壌中運命試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンをそれぞれ 0.225 mg/kg 乾土の用量で湛水状態の 3 種の土壌[重埴土（茨城）、砂埴土（香川）及び軽埴土（茨城）]に混和後、25°C、暗所で 180 日間インキュベーションし、好氣的及び嫌氣的（軽埴土のみ）条件下における、クロチアニジンの湛水土壌中運命試験が実施された。

クロチアニジンの推定半減期は、重埴土、砂埴土及び軽埴土で、好氣的条件下においてそれぞれ約 50 日、約 70 日及び約 60 日であった。嫌氣的条件下では、約 40 日であった。好氣的及び嫌氣的条件下のいずれの土壌でも、主要分解物は TMG であり、嫌氣的条件下の軽埴土で 11.4%TAR 生成した。その他の分解物はいずれも 2.9%TAR 以下であった。180 日後の非抽出放射能は、好氣的条件で 71.0～80.0%TAR、嫌氣的条件で 80.3%TAR に達した。揮発性成分は両条件下で 4.3%TAR 以下であった。滅菌土壌において、分解物は認められなかった。（参照 8）

### (2) 畑地土壌中運命試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを、それぞれ 0.5 mg/kg 乾土の用量で 3 種の土壌[重埴土（茨城）、砂埴土（香川）及び軽埴土（茨城）]

に混和後、25℃、暗所で180日間インキュベーションし、好氣的及び嫌氣的（軽埴土のみ）条件下における、クロチアニジンの畑地土壤中運命試験が実施された。

クロチアニジンの推定半減期は、重埴土、砂壤土及び軽埴土で、好氣的条件下においてそれぞれ約190日、約210日及び約200日であった。嫌氣的条件下では、約220日であった。好氣的及び嫌氣的条件下のいずれの土壌でも主要分解物はMNGであり、好氣的条件下の軽埴土で3.4% TAR生成した。180日後の非抽出放射能は好氣的条件下で40.7～45.2% TAR、嫌氣的条件下で40.0～44.8% TARであった。揮発性放射能は両条件下で8.5% TAR以下であった。（参照8）

### （3）土壌表面光分解試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを0.6 µg/cm<sup>2</sup>の用量で処理した軽埴土（茨城）の薄層（0.5 mm）に、14日間キセノン光（光強度：40 W/m<sup>2</sup>、測定波長：360～480 nm）を照射し、クロチアニジンの土壌表面光分解試験が実施された。

14日後の主な放射性成分はクロチアニジンであり、73.0% TAR認められた。分解物はいずれも1.3% TAR以下であった。対照処理区（遮光下）ではクロチアニジンは85% TARであった。（参照9）

### （4）土壌吸着試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを用いた土壌吸着試験が、4種類の国内土壌[重埴土（茨城）、砂壤土（香川）、軽埴土（茨城）及び軽埴土（宮崎）]を用いて実施された。

Freundlichの吸着係数K<sub>ads</sub>は1.12～14.8、有機炭素含有率により補正した吸着係数K<sub>oc</sub>は90.0～250であった。（参照10）

### （5）土壌カラムリーチング試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを用いた土壌移行試験が、3種類の国内土壌[重埴土（茨城）、砂壤土（香川）及び軽埴土（茨城）]を用いて実施された。深さ30 cmに充填した土壌カラムを作成し、[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを混和処理（重埴土及び砂壤土：98 µg、軽埴土：44 µg）した土壌20 gを均一に1 cmに積層（混和直後、又は混和後（30日間熟成））し、カラムリーチング試験を行った。

最も吸着の弱かった砂壤土におけるカラム流出液の放射エネルギーは、7.4% TAR（混和直後）及び2.5% TAR（30日間熟成）であり、その他は0.1% TAR以下であった。熟成土壌においては、処理土壌を含む深さ6 cmまでの画分に、重埴土及び軽埴土では85.1～94.1% TARが、砂壤土においても50% TAR以上の放射エネルギーが認められた。（参照10）

## 4. 水中運命試験

### （1）加水分解試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンをpH4.0（クエン酸緩衝

液)、pH5.0(クエン酸緩衝液)、pH7.0(クエン酸緩衝液)及びpH9.0(ホウ酸緩衝液)の各緩衝液、蒸留水並びに河川水(採取地:茨城、pH7.8)に濃度が1 mg/Lとなるよう溶解させ、25°Cで1年間又は50°Cで12週間インキュベートし、クロチアニジンの加水分解試験が実施された。

クロチアニジンの推定半減期は、25°C条件下ではpH9.0緩衝液で1.5年、河川水中で9年、50°C条件下ではpH9.0緩衝液で14日、蒸留水中で93日、河川水中で73日と算出された。他の条件下ではクロチアニジンは安定であり、半減期を求められなかった。主要分解物はTZMU、ACT、CTNU及びCO<sub>2</sub>であった。(参照11)

## (2) 水中光分解試験

[nit-<sup>14</sup>C]クロチアニジン又は[thi-<sup>14</sup>C]クロチアニジンを蒸留水、自然水(3種類)に濃度が1 mg/Lとなるよう溶解させ、25°Cでキセノン光(光強度:18 W/m<sup>2</sup>、測定波長:360~480 nm)を照射し、クロチアニジンの水中光分解試験が実施された。

クロチアニジンの推定半減期は、蒸留水で40~42分、自然水で46~58分であった。

主要分解物はTZMU、MAI、TMG、MG及びCO<sub>2</sub>であった。(参照12)

## 5. 土壌残留試験

火山灰・壤土(茨城)、沖積・砂質埴土(高知)、火山灰・軽埴土(茨城)及び壤質砂土(宮崎)を用いて、クロチアニジンを分析対象化合物とした土壌残留試験(容器内及びほ場)が実施された。

結果は表17に示されている。(参照13~18)

表 17 土壌残留試験成績（推定半減期）

試験	土壌	濃度	推定半減期（日）	
			クロチアニジン	クロチアニジン＋分解物
容器内試験 （湛水状態）	火山灰・壤土	純品	32	59
	沖積・砂質埴土	0.188 mg/kg	10	45
	火山灰・埴土	純品	34	61
	沖積・砂質埴土	0.25 mg/kg	29	200
容器内試験 （畑地状態）	火山灰・軽埴土	純品	67	98
	壤質砂土	0.50 mg/kg	53	68
ほ場試験 （水田状態）	火山灰・壤土	488 <sup>G</sup>	8	11
	沖積・砂質埴土	g ai/ha	4	7
	火山灰・埴土	850 <sup>G</sup> g ai/ha	16	34
	沖積・砂質埴土		4	7
ほ場試験 （畑地状態）	火山灰・軽埴土	500 <sup>G</sup> ＋480 <sup>SP</sup>	27	26
	壤質砂土	g ai/ha	65	65

注）・分解物：水田（湛水）状態では TZMU、TMG、MAI、畑地状態では MNG

・G：粒剤、SP：水溶剤

## 6. 作物等残留試験

### （1）作物残留試験

水稻、野菜、果実、豆類及び茶を用いて、クロチアニジンを分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。15種類の作物については TZNG、TZMU、MNG 及び TMG についても分析対象化合物とした。また、クロチアニジンを分析対象としたチアメトキサムの作物残留試験が実施された。結果は別紙 3 に示されている。

クロチアニジンの最大残留値は、最終散布 7 日後に収穫した茶（荒茶）の 38.0 mg/kg であったが、散布 14 日及び 21 日後にはそれぞれ 7.93 mg/kg 及び 3.28 mg/kg と減衰した。TZNG、TZMU、MNG 及び TMG の最大残留値は、全て茶で、それぞれ 0.167 mg/kg、1.21 mg/kg、0.44 mg/kg 及び 0.70 mg/kg であった。また、最終散布 42 日後のぶどうで TZNG (0.105 mg/kg) 及び MNG (0.113 mg/kg) が検出された。その他の作物における代謝物の残留値は全て 0.1 mg/kg 未満であった。（参照 19～20、61、96）

### （2）畜産物残留試験（泌乳牛）

泌乳牛（ホルスタイン種、一群 3 頭）にクロチアニジンを 0、0.28、0.84 及び 2.80 mg/kg 飼料となるように 28 日間カプセル経口投与して、クロチアニジンを分析対象とした畜産物残留試験が実施された。

全投与群の動物から毎日 2 回搾乳された乳汁並びに 0.84 及び 2.80 mg/kg 飼料 / 日投与群の動物を最終投与後 24 時間以内にと殺して採取された筋肉、脂肪、肝臓及び腎臓について、分析が行われた。

乳汁以外の試料では、クロチアニジン含量は検出限界（0.005 µg/g）未満であった。乳汁中クロチアニジン含量は、表 18 に示されている。

表 18 乳汁中クロチアニジン含量（µg/g）

投与量 (mg/kg 飼料/日)	クロチアニジン
0.28	<0.0005~<0.002
0.84	<0.0005~0.004
2.80	<0.0005~0.012

また、泌乳牛（ホルスタイン種、一群 3 頭）にクロチアニジンを 0、0.28、0.84 及び 2.80 mg/kg 飼料となるよう 28 日間カプセル経口投与して、代謝物 TZG、TZU 及び ATMG-Pyr を分析対象とした分析が行われた。

全ての試料において、TZG 及び ATMG-Pyr は検出限界（組織：0.005 µg/g、乳汁：0.002 µg/g）未満であった。TZU は 2.80 mg/kg 飼料/日投与群の乳汁で検出限界未満～定量限界（0.01 µg/g）未満であったほかは、全て検出限界以下であった。（参照 88）

### （3）乳汁移行試験

ホルスタイン種泌乳牛（2 頭）を用い、クロチアニジン（14 mg/頭/日）を 7 日間連続カプセル経口投与し、乳汁移行試験が実施された。

投与開始 1 日後から最終投与 5 日後まで搾乳した試料から、クロチアニジンは検出されなかった。（参照 21）

### （4）推定摂取量

作物残留試験成績に基づき、クロチアニジンを暴露評価対象物質として、食品中より摂取される推定摂取量が表 19 に示されている（別紙 4 参照）。なお、本推定摂取量の算定は、登録されている又は申請された使用方法から、クロチアニジンが最大の残留を示す使用条件で、クロチアニジン及びチアメトキサムが全ての適用作物に使用され、加工・調理による残留農薬の増減が全くないとの仮定の下に行った。

表 19 食品中より摂取されるクロチアニジンの推定摂取量

	国民平均 (体重:55.1 kg)	小児 (1~6 歳) (体重:16.5 kg)	妊婦 (体重:58.5 kg)	高齢者 (65 歳以上) (体重:56.1 kg)
摂取量 (µg/人/日)	774	335	761	995

## 7. 一般薬理試験

マウス、ラット及びモルモットを用いた一般薬理試験が実施された。結果は表 20 に示されている。(参照 22)

表 20 一般薬理試験

試験の種類	動物種	動物数 匹/群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大無作用量 (mg/kg 体重)	最小作用量 (mg/kg 体重)	結果の概要	
中枢神経	一般状態	ICR マウス	雄 3	0、12.5、 25、50、 100、200、 400 (経口)	25	50	50 mg/kg 体重以上投与群で自発運動低下、振戦、呼吸深大
	睡眠時間	ICR マウス	雄 8	0、25、75、 225 (経口)	75	225	225 mg/kg 体重投与群で睡眠時間の延長 死亡例：2 匹
	痙攣誘発作用 (電撃痙攣)	ICR マウス	雄 10	0、6.25、 12.5、25、 75、225 (経口)	12.5	25	25 mg/kg 体重以上投与群で、強直性屈曲及び強直性伸展痙攣の誘発
	痙攣誘発作用 (pentyle netetrazol 痙攣)	ICR マウス	雄 10	0、25、 75、225 (経口)	225	>225	作用なし
	体温 (直腸温)	SD ラット	雄 6	0、30、 100、300、 1,000、 3,000 (経口)	100	300	300 mg/kg 体重以上投与群で直腸温の低値
循環器	収縮期血圧・心拍数	SD ラット	雄 4	0、100、 300、 1,000、 3,000 (経口)	3,000	—	作用なし
自律神経	ACh 惹起収縮 His 惹起収縮 BaCl <sub>2</sub> 惹起収縮	Hartley モルモット 摘出回腸 標本	1 濃度 群：4 標 本	0、 1×10 <sup>-6</sup> 、 1×10 <sup>-5</sup> 、 1×10 <sup>-4</sup> mol/L ( <i>in vitro</i> )	1×10 <sup>-5</sup> mol/L	1×10 <sup>-4</sup> mol/L	1×10 <sup>-4</sup> mol/L で、BaCl <sub>2</sub> による惹起収縮を統計学的に有意に抑制 ACh、His による収縮反応は、全群 mol/L で認められなかった
消化器	小腸輸送能・活性炭素末移行率	ICR マウス	雄 8	0、25、75、 225 (経口)	25	75	75 mg/kg 体重以上投与群で小腸輸送能の抑制

骨格筋	懸垂動作	ICR マウス	雄 8	0、25、75、 225 (経口)	75	225	225 mg/kg 体重投与群で 3 時間後まで筋力の抑制 傾向
血液	血液凝固 PT、APTT	SD ラット	雄 6	0、300、 1,000、 3,000 (経口)	3,000	>3,000	作用なし

注) クロチアニジン原体を 5%アラビアゴム水溶液に懸濁した検体を強制経口投与した (Hartley モルモット 摘出回腸標本を用いた試験を除く。)

## 8. 急性毒性試験

### (1) 急性毒性試験

クロチアニジンの SD ラット及び ICR マウスを用いた急性経口毒性試験並びに SD ラットを用いた急性経皮毒性試験及び急性吸入毒性試験が実施された。

各試験の結果は表 21 に示されている。(参照 23~26)

表 21 急性毒性試験結果概要 (原体)

投与経路	動物種	LD <sub>50</sub> (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
経口	SD ラット (雌雄各 5 匹)	>5,000	>5,000	雄：1,758 mg/kg 体重以上で体重増加抑制、 眼瞼閉鎖、振戦、3,850 mg/kg 体重以上で衰弱 雌：1,758 mg/kg 体重以上で体重増加抑制、 眼瞼閉鎖、自発運動の低下、振戦、衰弱、脱毛 雄 5,000 mg/kg 体重、雌 2,965 mg/kg 体重以上で死亡例
	ICR マウス (雌雄各 5 匹)	389	465	雌雄とも 304 mg/kg 体重以上で自発運動低下、 眼瞼閉鎖 雌雄とも 380 mg/kg 体重以上で死亡例
経皮	SD ラット (雌雄各 5 匹)	>2,000	>2,000	症状及び死亡例なし
吸入	SD ラット (雌雄各 5 匹)	LC <sub>50</sub> (mg/L)		体重低下、運動失調、半閉眼、曲背位、嗜眠 死亡例なし
		>6.14	>6.14	

クロチアニジンの代謝物について、SD ラット及び NMRI マウスを用いた急性経口毒性試験が実施された。

結果は表 22 に示されている。なお、TZNG、TMG 及び MAI の雄に関しても例数は少ないが、雌とほぼ同様の LD<sub>50</sub> 値を示唆する結果が得られた。(参照 27~31、82、84)



表 22 急性経口毒性試験結果概要（代謝物）

被験物質	動物種	LD <sub>50</sub> (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
TZNG	SD ラット (雌 5 匹)	/	1,480	体重低下、嗜眠、眼瞼閉鎖 剖検で肺の暗赤色化、蒼白化、拡張 1,350 mg/kg 体重以上で死亡例
TZMU	SD ラット (雌雄各 5 匹)	1,420	1,280	嗜眠、眼瞼閉鎖 剖検で肺の拡張及び暗色化、胃粘膜の黄色化、盲腸の埋伏、肝臓の蒼白化及び斑紋 雌雄とも 1,152 mg/kg 体重以上で死亡例
TMG	SD ラット (雌 5 匹)	/	567	嗜眠、眼瞼閉鎖 剖検で肺及び肝臓の暗色化、肺及び空腸の拡張、腎の斑紋 650mg/kg 体重以上で死亡例
MG	SD ラット (雌雄各 5 匹)	550	446	鼻部の汚れ、流涎、弓背位、円背位 剖検で肺の暗赤色化及び膨張、胃の拡張及び蒼白化、小腸の肥大、腎盂拡張 雄 530 mg/kg 体重以上、雌 435 mg/kg 体重以上で死亡例
MAI	NMRI マウス (雌 5 匹)	/	758	体重低下、眼瞼閉鎖、嗜眠 剖検で肺の暗赤色化及び拡張、胃の異常内容物、小腸表面の緑色化 650mg/kg 体重以上で死亡例
ATMG-Pyr	SD ラット (雌雄各 5 匹)	>2,000	>2,000	症状及び死亡例なし
ATG-Ac	SD ラット (雌雄各 5 匹)	>2,000	>2,000	立毛、頻呼吸（雄） 死亡例なし

斜線：試験実施せず

## （２）急性神経毒性試験（ラット①）

Fischer ラット（一群雌雄各 12 匹）を用いた強制経口（原体：0、100、200 及び 400 mg/kg 体重、溶媒：0.4%Tween80 添加 0.5%MC 水溶液）投与による急性神経毒性試験が実施された。

400 mg/kg 体重投与群の雌雄で振戦、活動性低下、運動失調及び瞳孔ピンポイント化、雌で鼻部及び口部の着色並びに被毛の汚れ、200 mg/kg 体重以上投与群の雌雄で体温低下、雌で自発運動量減少が認められた。全投与群の雄で自発運動量減少が認められた。

本試験において、全投与群の雄及び 200 mg/kg 体重以上投与群の雌において自発運動量減少が認められたので、無毒性量は雄で 100 mg/kg 体重未満、雌で 100 mg/kg 体重であると考えられた。（参照 32）

### (3) 急性神経毒性試験 (ラット②)

Fischer ラット (一群雄 12 匹) を用いた強制経口 (原体: 0、20、40 及び 60 mg/kg 体重、溶媒: 0.4% Tween80 添加 0.5% MC 水溶液) 投与による急性神経毒性試験が実施された。

いずれの投与群でもクロチアニジン投与に関連した影響は認められなかったことから、本試験における急性神経毒性に対する無毒性量は、雄で 60 mg/kg 体重であると考えられた。(参照 33)

## 9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験

NZW ウサギを用いた眼一次刺激性試験及び皮膚一次刺激性試験が実施された。眼に対し軽度の刺激性が認められたが、皮膚に対して刺激性は認められなかった。(参照 34~35)

Hartley モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization 法) が実施され、皮膚感作性は認められなかった。(参照 36)

## 10. 亜急性毒性試験

### (1) 90 日間亜急性毒性試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 15 匹) を用いた混餌 (原体: 0、150、500 及び 3,000 ppm: 平均検体摂取量は表 23 参照) 投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

表 23 90 日間亜急性毒性試験 (ラット) の平均検体摂取量

投与群		150 ppm	500 ppm	3,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	9.0	27.9	202
	雌	10.9	34.0	254

各投与群で認められた毒性所見は表 24 に示されている。

3,000 ppm 投与群の雄で肝組織における *N*-Demeth、*O*-Demeth、PROD 及び EROD の増加が認められた。

本試験において、3,000 ppm 投与群の雌雄で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 500 ppm (雄: 27.9 mg/kg 体重/日、雌: 34.0 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 37~38)

表 24 90 日間亜急性毒性試験 (ラット) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
3,000 ppm	・ 体重増加抑制 ・ 脾色素沈着	・ 体重増加抑制
500 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

## (2) 90日間亜急性毒性試験（イヌ）

ビーグル犬（一群雌雄各4匹）を用いた混餌（原体：0、325、650、1,500及び2,250 ppm：平均検体摂取量は表25参照）投与による90日間亜急性毒性試験が実施された。

表25 90日間亜急性毒性試験（イヌ）の平均検体摂取量

投与群		325 ppm	650 ppm	1,500 ppm	2,250 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	9.2	19.3	40.9	58.2
	雌	9.6	21.2	42.1	61.8

各投与群で認められた毒性所見は表26に示されている。

本試験において、1,500 ppm以上投与群の雌雄で削瘦等が認められたので、無毒性量は雌雄とも650 ppm（雄：19.3 mg/kg 体重/日、雌：21.2 mg/kg 体重/日）であると考えられた。（参照39）

表26 90日間亜急性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2,250 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体重増加抑制</li> <li>・ Ht、WBC、Lym、Neu 減少</li> <li>・ ALT 減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ WBC、Lym 減少</li> <li>・ TP 減少</li> </ul>
1,500 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 削瘦</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 削瘦</li> <li>・ Alb、ALT 減少</li> </ul>
650 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

## (3) 90日間亜急性神経毒性試験（ラット）

Fischer ラット（一群雌雄各12匹）を用いた混餌（原体：0、150、1,000及び3,000 ppm：平均検体摂取量は表27参照）投与による90日間亜急性神経毒性試験が実施された。

表27 90日間亜急性神経毒性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		150 ppm	1,000 ppm	3,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	9.2	60.0	177
	雌	10.6	71.0	200

各投与群で認められた毒性所見は表28に示されている。

3,000 ppm 投与群の雌雄で体重増加抑制等が認められたので、本試験での無毒性量は、雌雄で1,000 ppm（雄：60.0 mg/kg 体重/日、雌：71.0 mg/kg 体重/日）

であると考えられた。亜急性神経毒性は認められなかった。（参照 40）

表 28 90 日間亜急性神経毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
3,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制、摂餌量減少</li> <li>・脳比重量<sup>2</sup>増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制、摂餌量減少</li> <li>・脳比重量増加</li> </ul>
1,000 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

## 1 1. 慢性毒性試験及び発がん性試験

### (1) 1 年間慢性毒性試験（イヌ）

ビーグル犬（一群雌雄各 4 匹）を用いた混餌（原体：0、325、650、1,500 及び 2,000 ppm：平均検体摂取量は表 29 参照）投与による 1 年間慢性毒性試験が実施された。

表 29 1 年間慢性毒性試験（イヌ）の平均検体摂取量

投与群		325 ppm	650 ppm	1,500 ppm	2,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	7.8	16.6	36.3	46.4
	雌	8.5	15.0	40.1	52.9

各投与群で認められた毒性所見は表 30 に示されている。

2,000 ppm 投与群雌で認められた副腎比重量増加は、絶対重量に有意差がみられず、関連した病理組織学的変化も観察されなかったため、投与に関連した変化とは考えなかった。また、650 ppm 以上投与群の雌雄で認められた ALT 減少は、関連した病理組織学的変化が観察されなかったため、投与に関連した毒性影響とは考えなかった。

本試験において、2,000 ppm 投与群の雄及び 1,500 ppm 以上投与群の雌で耳局部紅斑等が認められたため、無毒性量は雄で 1,500 ppm (36.3 mg/kg 体重/日)、雌で 650 ppm (15.0 mg/kg 体重/日) であると考えられた。（参照 41）

表 30 1 年間慢性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耳局所的紅斑、体重減少</li> <li>・Ht、WBC、Lym、Neu 減少</li> <li>・ALT 減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂餌量減少</li> <li>・RBC、Hb、Ht、WBC、Neu 減少</li> </ul>
1,500 ppm 以上	1,500 ppm 以下毒性所見なし	・耳局所的紅斑
650 ppm 以下		毒性所見なし

<sup>2</sup>体重比重量のことを比重量という（以下同じ。）。

## (2) 2年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）

SD ラット（一群雌雄各 80 匹）を用いた混餌（原体：0、150、500、1,500 及び 3,000 ppm：平均検体摂取量は表 31 参照）投与による 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。

表 31 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		150 ppm	500 ppm	1,500 ppm	3,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	8.1	27.4	82.0	157
	雌	9.7	32.5	97.8	193

各投与群で認められた毒性所見は表 32 に、甲状腺において認められた腫瘍性病変及び発生頻度は表 33 にそれぞれ示されている。

1,500 ppm 以上投与群雌で甲状腺 C 細胞腺腫の所見数増加が認められた。しかし、用量相関性が認められず、また前癌病変である C 細胞過形成の所見数に有意な増加が認められなかったため、検体投与に起因したものは考えられなかった。

本試験において、1,500 ppm 以上投与群の雄で体重増加抑制等が、500 ppm 以上投与群の雌で卵巣間質腺過形成が認められたため、無毒性量は雄で 500 ppm (27.4 mg/kg 体重/日)、雌で 150 ppm (9.7 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 42)

表 32 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）で認められた毒性所見  
(非腫瘍性病変)

投与群	雄	雌
3,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リン増加</li> <li>・腺胃浮腫、出血</li> <li>・肝臓好酸性細胞巣増加</li> <li>・腎盂鉍質沈着、腎盂移行上皮過形成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腺胃浮腫、びらん</li> <li>・肝臓好酸性細胞巣増加</li> </ul>
1,500 ppm 以上	・体重増加抑制、摂餌量減少	・体重増加抑制、摂餌量減少
500 ppm 以上	500 ppm 以下毒性所見なし	・卵巣間質腺過形成
150 ppm		毒性所見なし

表 33 甲状腺において認められた腫瘍性病変及び発生頻度

性別	雄					雌				
	0	150	500	1,500	3,000	0	150	500	1,500	3,000
投与量(ppm)	0	150	500	1,500	3,000	0	150	500	1,500	3,000
検査動物数	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80
甲状腺 C 細胞過形成	15	8	12	14	19	19	24	19	19	15
甲状腺 C 細胞腺腫	8	13	17 <sup>#</sup>	16	5	7	13	9	17 <sup>#</sup>	16 <sup>#</sup>
C 細胞癌	5	1	1	1	3	2	2	1	1	1
C 細胞腺腫/癌合計	13	14	18	17	8	9	15	10	18	17

Fisher-Irwin exact の検定、<sup>#</sup> : P<0.05

### (3) 18 か月間発がん性試験 (マウス)

ICR マウス (一群雌雄各 50 匹) を用いた混餌 (原体 : 0、100、350、1,250 及び 2,000/1,800<sup>3</sup> ppm : 平均検体摂取量は表 34 参照) 投与による 18 か月間発がん性試験が実施された。

表 34 18 か月間発がん性試験 (マウス) の平均検体摂取量

投与群		100 ppm	350 ppm	1,250 ppm	2,000/1,800 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	13.5	47.2	171	252
	雌	17.0	65.1	216	281

各投与群で認められた主な所見は表 35 に示されている。

本試験において、1,250 ppm 以上投与群の雌雄で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 350 ppm (雄 : 47.2 mg/kg 体重/日、雌 : 65.1 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 43)

表 35 18 か月間発がん性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2,000/1,800 ppm	・ 摂餌量減少	・ 摂餌量減少 ・ 卵巣比重量増加
1,250 ppm 以上	・ 体重増加抑制、異常発声 ・ 腎比重量減少、肝細胞肥大	・ 体重増加抑制、異常発声
350 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

<sup>3</sup> 試験開始時は 1,250 ppm を最高用量と設定していたが、より高い用量が必要であると考え、当初設定していた 700 ppm 投与群を、投与 5 週時より 2,000 ppm、投与 11 週より 2,500 ppm、投与 35 週より雄 2,000 ppm、雌 1,800 ppm と変更した。検体摂取量は雄で 2,000、雌で 1,800 ppm の飼料投与時の値を用いて計算した。

## 1 2. 生殖発生毒性試験

### (1) 2 世代繁殖試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 30 匹) を用いた混餌 (原体 : 0、150、500 及び 2,500 ppm : 平均検体摂取量は表 36 参照) 投与による 2 世代繁殖試験が実施された。

表 36 2 世代繁殖試験 (ラット) の平均検体摂取量

投与群		150 ppm	500 ppm	2,500 ppm	
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P 世代	雄	9.8	31.2	163
		雌	11.5	36.8	189
	F <sub>1</sub> 世代	雄	10.7	34.3	196
		雌	12.2	39.0	237

各投与群で認められた毒性所見は表 37 に示されている。

2,500 ppm 群において、精子前進性低下が認められたが、精子運動性に世代間に共通した大きな変化はなく、精子細胞数、精子数、精子形態及び生殖器の病理組織学的所見に変化は見られず、繁殖能にも変化が認められなかったことから、毒性学的意義は乏しいものと考えられた。また、児動物で認められた膣開口及び包皮分離の遅延は体重増加抑制に起因した変化と考えられた。

本試験において、親動物では、P 世代において雌の 500 ppm 以上投与群で体重増加抑制が、児動物では、F<sub>1</sub> 世代において 500 ppm 以上投与群で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は親動物及び児動物の雌雄で 150 ppm (P 雄 : 9.8 mg/kg 体重/日、P 雌 : 11.5 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雄 : 10.7 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雌 : 12.2 mg/kg 体重/日) であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。(参照 44)

表 37 2 世代繁殖試験（ラット）で認められた毒性所見

	投与群	親：P、児：F <sub>1</sub>		親：F <sub>1</sub> 、児：F <sub>2</sub>	
		雄	雌	雄	雌
親動物	2,500 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・脳、胸腺比重量増加</li> <li>・腎、脾絶対重量減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腎、脾絶対重量減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・副腎、脳、精巣、精巣上体、胸腺比重量増加</li> <li>・腎、脾、前立腺、精囊絶対重量減少</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・副腎、脳、肝、胸腺比重量増加</li> <li>・脾絶対重量減少</li> </ul>
	500 ppm 以上	500 ppm 以下 毒性所見なし	・体重増加抑制	500 ppm 以下 毒性所見なし	500 ppm 以下 毒性所見なし
	150 ppm		毒性所見なし		
児動物	2,500 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・膣開口遅延</li> <li>・脳比重量増加</li> <li>・脾比重量減少</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重低下</li> <li>・脳比重量増加</li> <li>・脾比重量減少</li> </ul>	
	500 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制</li> <li>・包皮分離遅延</li> </ul>		500 ppm 以下毒性所見なし	
	150 ppm	毒性所見なし			

### (2) 発生毒性試験（ラット）

SD ラット（一群雌 25 匹）の妊娠 6～19 日に強制経口（原体：0、10、40 及び 125 mg/kg 体重/日、溶媒：0.5%MC 水溶液）投与して、発生毒性試験が実施された。

母動物では、40 mg/kg 体重/日以上投与群で体重増加抑制及び摂餌量減少が認められ、胎児では、検体投与に起因した変化は認められなかったことから、本試験の無毒性量は母動物で 10 mg/kg 体重/日、胎児で 125 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。（参照 45）

### (3) 発生毒性試験（ウサギ）

NZW ウサギ（一群雌 23 匹）の妊娠 6～28 日に強制経口（原体：0、10、25、75 及び 100 mg/kg 体重/日、溶媒：0.5%MC 水溶液）投与して、発生毒性試験が実施された。

母動物では 75 及び 100 mg/kg 体重/日群でそれぞれ 2 及び 3 匹が死亡/切迫と殺された。また 100 mg/kg 体重投与群では妊娠 14～29 日にかけて体重増加抑制が認められ、6 例が妊娠 20～28 日の間で流産した。75 mg/kg 体重以上投与群で排便減少（妊娠 13～29 日）及び着色尿増加（妊娠 10～29 日）が認められた。

胎児では 100 mg/kg/日体重投与群の雌雄で低体重、腎臓低形成及び尾椎椎体癒合、75 mg/kg 体重以上投与群で肺中葉欠損及び骨化遅延の発現頻度上昇が認



められた。

胎児における腎臓低形成は1母体に偏った発現であり、肺中葉欠損及び尾椎椎体癒合の発現率は背景データの範囲内であったので、投与に関連した影響ではないと考えられた。

本試験の無毒性量は母動物及び胎児で 25 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。(参照 46)

#### (4) 発達神経毒性試験 (ラット)

SD ラット (一群 25 匹) の妊娠 0 日～分娩後 22 日 (56 日間) の母動物に、混餌 (原体 : 0、150、500 及び 1,750 ppm : 平均検体摂取量は表 38 参照) 投与して、発達神経毒性試験が実施された。

表 38 発達神経毒性試験 (ラット) の平均検体摂取量

投与量		150 ppm	500 ppm	1,750 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	妊娠期間中	12.9	42.9	142
	哺育期間中	27.3	90.0	299

各投与群で認められた毒性所見は表 39 に示されている。

1,750 ppm 群の雌の形態計測において、生後 12 日で海馬歯状回及び小脳の厚みの軽度な増加並びに小脳顆粒層の厚みの低下が観察されたが、生後 83～87 日の検査では、同様の変化は認められず、海馬歯状回及び尾状核皮殻の厚みが軽度に減少した。これらの変化は軽度で連続性がなく、対応する病理組織学的変化も認められないことから、毒性学的に意義のある変動ではないと考えられた。

本試験において、1,750 ppm 投与群の母動物で体重増加抑制等が、500 ppm 以上投与群の児動物で体重増加抑制が認められたので、無毒性量は母動物で 500 ppm (妊娠中 : 42.9 mg/kg 体重/日、哺育中 : 90.0 mg/kg 体重/日)、児動物では 150 ppm (妊娠中 : 12.9 mg/kg 体重/日、哺育中 : 27.3 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発達神経毒性は認められなかった。(参照 79)

表 39 発達神経毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	母動物	児動物		
		哺育中	離乳後	
			雄	雌
1,750 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体重増加抑制（妊娠0～3日、哺育4～7日）</li> <li>・摂餌量低下（妊娠期間、哺育期間）</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・死亡例（2例）（生後26、27日）</li> <li>・摂餌量減少（51-58、65-72日齢）</li> <li>・運動回数、運動時間減少（生後22日、62日）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・死亡例（3例）（生後25、26、26日）</li> <li>・自発運動量減少（生後22日、62日）</li> <li>・体重増加抑制</li> <li>・聴覚性驚愕反応低下（生後23日）</li> </ul>
500 ppm 以上	500 ppm 以下 毒性所見なし	・体重増加抑制	500 ppm 以下 毒性所見なし	500 ppm 以下 毒性所見なし
150 ppm		毒性所見なし		

### 1 3. 遺伝毒性試験

クロチアニジンの細菌を用いた復帰突然変異試験、チャイニーズハムスター肺由来培養細胞（V79）を用いた遺伝子突然変異試験、マウスリンパ腫細胞（L5178Y）を用いた遺伝子突然変異試験、チャイニーズハムスター肺由来培養細胞（CHL、V79）を用いた染色体異常試験、ラット肝初代培養細胞を用いた *in vivo/in vitro* 不定期 DNA 合成試験及びマウスを用いた小核試験が実施された。結果は、細菌を用いた復帰突然変異試験の一部で弱い陽性が認められ、また、マウスリンパ腫細胞（L5178Y）を用いた遺伝子突然変異試験、CHL 細胞及び V79 細胞を用いた染色体異常試験でも陽性反応が認められたが、他は陰性であった（表 40）。マウスを用いた小核試験の結果が陰性であった点及びラット肝初代培養細胞を用いた不定期 DNA 合成試験においても陰性であった点を考慮し、総合的に判断すれば、クロチアニジンに生体において問題となる遺伝毒性はないものと考えられた。（参照 47～51、72～78、83、85）

表 40 遺伝毒性試験概要（原体）

試験	対象	投与量・処理濃度	結果	
<i>in vitro</i>	復帰突然変異試験	<i>Salmonella typhimurium</i> (TA98、TA100、TA102、 TA1535、TA1537 株)	16～5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性
		<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537 株)	50～5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性 (-S9) 弱い陽性 (+S9)
		<i>S. typhimurium</i> (TA1535 株)	1,000～8,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性
	遺伝子突然変異試験	チャイニーズハムスター肺 由来培養細胞 (V79)	156～5,000 µg/mL (+/-S9)	陰性
			125～2,500 µg/mL (-S9) 156～2,500 µg/mL (+S9)	陰性
		マウスリンパ腫細胞 (L5178Y)	300～2,500 µg/mL (-S9) 600～2,500 µg/mL (+S9)	陽性
	染色体異常試験	チャイニーズハムスター肺 由来細胞 (CHL)	156～1,250 µg/mL (-S9) 938～1,880 µg/mL (+S9)	陽性
			チャイニーズハムスター肺 由来培養細胞 (V79)	750～2,000 µg/mL (-S9) 500～1,000 µg/mL (+S9)
	<i>in vivo/in vitro</i>	不定期 DNA 合成試験	Wistar ラット雄 4～6 匹	2,500、5,000 mg/kg 体重 (単回強制経口投与)
Wistar ラット雄 3 匹			1,000、2,000 mg/kg 体重 (単回強制経口投与)	陰性
<i>in vivo</i>	小核試験	ICR マウス雌雄 5 匹	25、50、100 mg/kg 体重 (単回強制経口投与)	陰性
		NMRI マウス雌雄 5 匹	50、100、200 mg/kg 体重 (単回腹腔投与)	陰性

注) ±S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

TZNG（動物、植物、土壌及び光由来）、TZMU（動物、植物、土壌、水中及び光由来）、TMG（動物、植物、土壌及び光由来）、MG（動物、植物及び光由来）、MAI（光由来）、ATMG-Pyr（動物由来）及び ATG-Ac（動物由来）の細菌を用い

た復帰突然変異試験において、試験結果は全て陰性であった（表 41）。（参照 52～56）

表 41 遺伝毒性試験結果概要（代謝/分解物）

試験		被験物質	対象	投与量・処理濃度	結果
<i>in vitro</i>	復帰突然変異試験	TZNG	<i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、 TA102、TA1535、 TA1537 株)	8～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
		TZMU		8～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
		TMG		8～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
		MG		8～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
		MAI		8～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
		ATMG-Pyr		1.6～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性
		ATG-Ac		1.6～5,000 µg/7° レート (+/-S9)	陰性

注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

#### 14. その他の試験

##### (1) 28 日間亜急性毒性/免疫毒性試験（ラット）

SD ラット（一群雌雄各 10 匹）にクロチアニジン を 28 日間混餌（原体：0、150、500 及び 3,000 ppm：平均検体摂取量は表 42 参照）投与し、T 細胞依存性抗原であるヒツジ赤血球に対する脾臓 IgM 抗体産生細胞反応を陽性対照であるシクロホスファミドの効果と比較する、亜急性毒性/免疫毒性試験が実施された。

表 42 亜急性毒性/免疫毒性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与量		150 ppm	500 ppm	3,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	13.8	45.8	253
	雌	14.0	46.2	253

本試験の最高用量である 3,000 ppm 投与群においても、T リンパ球依存性反応に影響は認められなかった。

3,000 ppm 雌雄で摂餌量減少、雄ではこれに加え体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 500 ppm（雄：45.8 mg/kg 体重/日、雌：46.2 mg/kg 体重/日）であると考えられた。免疫毒性は認められなかった。（参照 80）

## (2) 発達免疫毒性試験 (ラット)

SD ラット (1 群雌 25 匹) の妊娠 6 日～哺育 21 日又は妊娠 6～24 日 (分娩が認められなかった動物) の母動物に、クロチアニジンを混餌 (原体 : 0、150、500 及び 2,000 ppm : 平均検体摂取量は表 43 参照) 投与し、T 細胞依存性抗原であるヒツジ赤血球に対する脾臓 IgM 抗体産生細胞 (AFC) 反応又は遅延型過敏 (DTH) 反応を陽性対照であるシクロホスファミドの影響と比較する、発達免疫毒性試験が実施された。

表 43 発達免疫毒性試験 (ラット) の平均検体摂取量

投与量				150 ppm	500 ppm	2,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	母動物	妊娠	6-20 日	10.4	35.0	121
		哺育	0-13 日	22.3	68.3	250
			13-16 日	30.6	92.4	367
			16-21 日	35.6	107	396
	児動物	AFC 反応	雄	27.5	97.9	404
			雌	26.4	92.9	404
		DTH 反応	雄	28.2	88.9	338
			雌	26.8	92.6	398

各投与群で認められた毒性所見は表 44 に示されている。

T 細胞依存性抗原であるヒツジ赤血球に対する脾臓 IgM AFC 反応において、2,000 ppm 群の雌雄で脾臓及び胸腺絶対重量の約 20% の減少が認められたが、約 20% の体重増加抑制に起因するものと考えられた。また同群の雌雄では約 20% の脾臓細胞数の減少、雄で AFC 比活性及び AFC 総活性の増加が認められたが、これらについても免疫毒性を示唆するものではなく、同群で観察された体重増加抑制に伴う脾臓及び胸腺の絶対重量低下に関連した変化であると考えられた。

DTH 反応には投与による変化は認められなかった。

本試験において、母動物で 2,000 ppm 投与群で体重増加抑制等が認められ、500 ppm 以上投与群の離乳後児動物の雄で体重増加抑制が認められたので、無毒性量は母動物で 500 ppm (妊娠 6-20 日 ; 35.0 mg/kg 体重/日、哺育 0-13 日 ; 68.3 mg/kg 体重/日、13-16 日 ; 92.4 mg/kg 体重/日、16-21 日 ; 107 mg/kg 体重/日)、離乳後児動物で 150 ppm (AFC 反応群 : 雄 ; 27.5 mg/kg 体重/日、雌 ; 26.4 mg/kg 体重/日、DTH 反応群 : 雄 ; 28.2 mg/kg 体重/日、雌 26.8 mg/kg 体重/日) であると考えられた。次世代への免疫毒性は認められなかった。(参照 81)

表 44 発達免疫毒性試験（ラット）で認められた毒性所見

投与群	母動物	児動物		
		哺育中	離乳後	
			雄	雌
2,000 ppm	・体重増加抑制及び摂餌量減少 ・眼瞼下垂発生頻度増加	・低体重	・摂餌量減少	・体重増加抑制及び摂餌量減少
500 ppm 以上	500 ppm 以下 毒性所見なし	500 ppm 以下 毒性所見なし	・体重増加抑制 (離乳後 1 日)	500 ppm 以下 毒性所見なし
150 ppm			毒性所見なし	

(3) 児動物への影響検討試験①<参考資料<sup>4</sup>>

ICR マウス（一群雌 10 匹）の妊娠期間及び哺育期間にクロチアニジンを混餌（分析標品、純度>99.0%：0、20、60 及び 180 ppm：平均検体摂取量は表 45 参照）投与し、児動物への影響が検討された。

表 45 児動物への影響検討試験①の平均検体摂取量

投与群		20 ppm	60 ppm	180 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	妊娠期間	3.00	8.81	28.6
	哺育期間	11.7	32.7	99.7

母動物においては、検体投与の影響は認められなかった。

また、児動物において、行動観察等の検査項目に変化が認められたが、これらの所見はいずれも用量相関性がないか又は群間での差が明確ではなく、食品安全委員会は、検体投与の影響ではないと判断した。（参照 106）

(4) 児動物への影響検討試験②<参考資料<sup>5</sup>>

ICR マウス（一群雌雄各 10 匹）の P 世代の 5 週から F<sub>1</sub> 世代の 11 週にクロチアニジンを混餌（分析標品、純度>99.0%：0、30、60 及び 120 ppm：平均検体摂取量は表 46 参照）投与し、児動物への影響が検討された。

<sup>4</sup> 被験物質の混餌飼料中の安定性等が不明なため参考資料とした。

<sup>5</sup> 被験物質の混餌飼料中の安定性等が不明なため参考資料とした。

表 46 児動物への影響検討試験②の平均検体摂取量

投与群				30 ppm	60 ppm	120 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P 世代	雄	生育期間	4.37	8.94	18.5
		雌	生育期間	4.97	9.97	12.3
			妊娠期間	4.49	8.82	18.3
			哺育期間	15.2	30.6	60.3
	F <sub>1</sub> 世代	雄		4.50	9.00	19.1
		雌		5.45	11.1	22.0

母動物及び児動物において、行動観察等の検査項目に変化が認められたが、これらの所見はいずれも用量相関性がないか又は群間での差が明確ではなく、食品安全委員会は、検体投与の影響ではないと判断した。(参照 107)

### Ⅲ. 食品健康影響評価

参照に挙げた資料を用いて農薬「クロチアニジン」の食品健康影響評価を実施した。

<sup>14</sup>C で標識したクロチアニジンのラット、マウス、ヤギ及びニワトリを用いた動物体内運命試験の結果、クロチアニジンは経口投与後速やかに吸収され、ラットの吸収率は少なくとも 89.2%であった。ラット、マウス及びヤギともに投与放射能は主に尿中に排泄された。投与後 24 時間以内に投与量の大部分が排泄され、組織への残留性は認められなかった。ラット及びマウスの尿中では未変化のクロチアニジンが最も多く、主要代謝物として TZNG、MNG 及び MTCA が検出された。ヤギ及びニワトリでは、ラット及びマウスで検出されない代謝物として ATMG-Pyr 及び ATG-Ac が 10%TRR を超えて認められた。

<sup>14</sup>C で標識したクロチアニジンの植物体内運命試験の結果、いずれの植物においても残留放射能の主要成分は未変化のクロチアニジンであった。10%TRR を超える代謝物として、可食部で TZMU、MG 及び MNG が、非食部位（稲わら、籾殻など）で TZMU、TMG 及び MG が検出された。

クロチアニジン、TZNG、TZMU、MNG 及び TMG を分析対象化合物とした作物残留試験が実施され、クロチアニジンの最大残留値は、茶（荒茶）の 38.0 mg/kg であった。TZNG、TZMU、MNG 及び TMG の最大残留値も、全て茶であり、それぞれ 0.167 mg/kg、1.21 mg/kg、0.44 mg/kg 及び 0.70 mg/kg であった。

畜産動物（乳牛）を用いてクロチアニジン並びに代謝物 TZG、TZU 及び ATMG-Pyr を分析対象化合物とした畜産物残留試験が実施された結果、クロチアニジンは乳汁で 0.012 µg/g 検出された。代謝物は全て定量限界以下であった。

各種毒性試験結果から、クロチアニジン投与による影響は主に体重（増加抑制）に認められた。神経毒性、免疫毒性、発がん性、繁殖能に対する影響、催奇形性、発達神経毒性及び生体において問題となる遺伝毒性は認められなかった。

各種試験結果から、農産物及び畜産物中の暴露評価対象物質をクロチアニジン（親化合物のみ）と設定した。

各試験における無毒性量等は表 48 に、単回経口投与等により惹起されると考えられる毒性影響等は表 49 にそれぞれ示されている。

食品安全委員会は、各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験の 9.7 mg/kg 体重/日であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.097 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量（ADI）と設定した。

また、クロチアニジンの単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響に対する無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた急性神経毒性試験の 60 mg/kg 体重であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.6 mg/kg 体重を急性参照用量（ARfD）と設定した。



ADI	0.097 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	慢性毒性/発がん性併合試験
(動物種)	ラット
(期間)	2年間
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	9.7 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

ARfD	0.6 mg/kg 体重
(ARfD 設定根拠資料)	急性神経毒性試験
(動物種)	ラット
(投与方法)	単回強制経口
(無毒性量)	60 mg/kg 体重
(安全係数)	100

表 48 各試験における無毒性量等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日)	最小毒性量 (mg/kg 体重/日)	備考 <sup>6</sup>
ラット	90 日間亜急性毒性試験	0、150、500、 3,000 ppm 雄：0、9.0、27.9、 202 雌：0、10.9、 34.0、254	雄：27.9 雌：34.0	雄：202 雌：254	雌雄：体重増加抑制等
	90 日間亜急性神経毒性試験	0、150、1,000 及び 3,000 ppm 雄：0、9.2、60.0、 177 雌：0、10.6、 71.0、200	雄：60.0 雌：71.0	雄：177 雌：200	雌雄：体重増加抑制等  (亜急性神経毒性は認められない)
	2 年間慢性毒性/発がん性併合毒性試験	0、150、500、 1,500、3,000 ppm 雄：0、8.1、27.4、 82.0、157 雌：0、9.7、32.5、 97.8、193	雄：27.4 雌：9.7	雄：82.0 雌：32.5	雄：体重増加抑制等 雌：卵巣間質腺過形成  (発がん性は認められない)
	2 世代繁殖試験	0、150、500、 2,500 ppm P 雄：0、9.8、 31.2、163 P 雌：0、11.5、 36.8、189 F <sub>1</sub> 雄：0、10.7、 34.3、196 F <sub>1</sub> 雌：0、12.2、 39.0、237	親動物及び児動物 P 雄：9.8 P 雌：11.5 F <sub>1</sub> 雄：10.7 F <sub>1</sub> 雌：12.2	親動物 P 雄：31.2 P 雌：36.8 F <sub>1</sub> 雄：34.3 F <sub>1</sub> 雌：39.0	親動物 雌：体重増加抑制 児動物 雌雄：体重増加抑制等  (繁殖毒性は認められない)
	発生毒性試験	0、10、40、125	母動物：10 胎児：125	母動物：40 胎児：-	母動物：体重増加抑制 胎児：毒性所見なし  (催奇形性は認められない)
	発達神経毒性試験	0、150、500、 1,750 ppm	母動物：42.9 (妊娠中)、90.0 (哺育中) 児動物：12.9 (妊娠中)、27.3 (哺育中)	母動物：142 (妊娠中)、299 (哺育中) 児動物：42.9 (妊娠中)、90.0 (哺育中)	母動物：体重増加抑制等 児動物：体重増加抑制  (発達神経毒性は認められない)
		妊娠期間中： 0、12.9、42.9、 142 哺育期間中：			

<sup>6</sup> 備考に最小毒性量で認められた所見の概要を示す。

		0、27.3、90.0、299			
マウス	18 か月間発がん性試験	0、100、350、1,250、2,000/1,800 ppm 雄：0、13.5、47.2、171、252 雌：0、17.0、65.1、216、281	雄：47.2 雌：65.1	雄：171 雌：216	雌雄：体重増加抑制等  (発がん性は認められない)
ウサギ	発生毒性試験	0、10、25、75、100	母動物：25 胎児：25	母動物：75 胎児：75	母動物：排便減少等 胎児：骨化遅延等  (催奇形性は認められない)
イヌ	90 日間亜急性毒性試験	0、325、650、1,500 及び 2,250 ppm 雄：0、9.2、19.3、40.9、58.2 雌：0、9.6、21.2、42.1、61.8	雄：19.3 雌：21.2	雄：40.9 雌：42.1	雌雄：消瘦等
	1 年間慢性毒性試験	325、650、1,500、2,000 ppm 雄：0、7.8、16.6、36.3、46.4 雌：0、8.5、15.0、40.1、52.9	雄：36.3 雌：15.0	雄：46.4 雌：40.1	雌雄：耳局部紅斑等

-：無毒性量又は最小毒性量が設定できなかった。

表 49 単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重又は mg/kg 体重/日)	無毒性量及び急性参照用量設定に関連するエンド ポイント <sup>1)</sup> (mg/kg 体重又は mg/kg 体重/日)
ラット	急性神経毒性 試験①	0、100、200、400	雄：－ 雌：100  雄：自発運動量減少 雌：体温低下、自発運動量減少
	急性神経毒性 試験②	0、20、40、60	雄：60  雄：該当なし
ARfD			NOAEL：60 SF：100 ARfD：0.6
ARfD 設定根拠資料			ラット急性神経毒性試験②

ARfD：急性参照用量 SF：安全係数 NOAEL：無毒性量 －：無毒性量は設定できない

<sup>1)</sup> 最小毒性量で認められた主な毒性所見を記した。

<別紙 1 : 代謝物/分解物略称>

略称	化学名
ACT	5-aminomethyl-2-chlorothiazole
ATG-Ac	<i>N</i> '-[amino(2-chlorothiazol-5-ylmethylamino)methylene]-acetohydrazide
ATMG-Pyr	<i>N</i> '-[(2-chlorothiazol-5-ylmethylamino)(methylamino)methylene]-2-oxopropanohydrazide
CTNU	<i>N</i> '(2-chlorothiazol-5-ylmethyl)- <i>N</i> 'nitrourea
MAI	3-methylamino-1 <i>H</i> imidazo[1,5- <i>c</i> ]imidazole
MG	methylguanidine
MNG	<i>N</i> -methyl- <i>N</i> 'nitroguanidine
MTCA	2-methylthiothiazole-5-carboxylic acid
NTG	nitroguanidine
TMG	<i>N</i> '(2-chlorothiazol-5-ylmethyl)- <i>N</i> 'methylguanidine
TZMU	<i>N</i> '(2-chlorothiazol-5-ylmethyl)- <i>N</i> 'methylurea
TZNG	<i>N</i> '(2-chlorothiazol-5-ylmethyl)- <i>N</i> 'nitroguanidine
TZU	2-chlorothiazol-5-ylmethylurea

<別紙 2 : 検査値等略称>

略称	名称
ACh	アセチルコリン
ai	有効成分量 (active ingredient)
Alb	アルブミン
ALP	アルカリホスファターゼ
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ
APTT	活性化部分トロンボプラスチン時間
AUC	薬物濃度曲線下面積
Chol	コレステロール
CL	クリアランス値
C <sub>max</sub>	最高濃度
EROD	エトキシレゾルフィン <i>O</i> -デエチラーゼ
GSH	グルタチオン
Hb	ヘモグロビン
His	ヒスタミン
Ht	ヘマトクリット値
LC <sub>50</sub>	半数致死濃度
LD <sub>50</sub>	半数致死量
Lym	リンパ球数
MC	メチルセルロース
MRT	平均滞留時間
<i>N</i> -Demeth	アミノピリン <i>N</i> -デメチラーゼ
Neu	好中球数
<i>O</i> -Demeth	<i>p</i> -ニトロアニソール <i>O</i> -デメチラーゼ
PHI	最終使用から収穫までの日数
PROD	ペントキシレゾルフィン <i>O</i> -デペンチラーゼ
PT	プロトロンビン時間
RBC	赤血球数
TAR	総投与 (処理) 放射能
T <sub>1/2</sub>	消失半減期
T <sub>max</sub>	最高濃度到達時間
TP	総蛋白質
TRR	総残留放射能
V <sub>ss</sub>	定常状態における分布容積
WBC	白血球数

<別紙3：作物残留試験成績>

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
稲 (玄米) 1998年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G+</sup> 60 <sup>SP</sup> ×3	4	13~14	0.124	0.104	0.013	0.010	0.076	0.046	0.014	0.012	0.06	0.02
			4	20~21	0.135	0.109	0.015	0.011	0.062	0.040	0.019	0.012*	0.04	0.02
			4	27~28	0.095	0.077	0.012	0.008	0.041	0.028	0.011	0.008*	0.01	0.01
稲 (玄米) 1998年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G</sup> + 100 <sup>G</sup> ×3	4	13~14	0.027	0.010*	<0.004	<0.004	<0.005	<0.005	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01
			4	20~21	0.022	0.010*	<0.004	<0.004	<0.005	<0.005	<0.02	<0.02	<0.06	0.02*
			4	27~28	0.014	0.007*	<0.004	<0.004	<0.005	<0.005	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01
稲 (玄米) 1998年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G</sup> + 60 <sup>D</sup> ×3	4	13~14	0.051	0.032	<0.004	<0.004	0.015	0.009	<0.009	<0.007	<0.01	<0.01
			4	20~21	0.050	0.028	0.005	0.004*	0.010	0.007	<0.009	<0.007	<0.01	<0.01
			4	27~28	0.046	0.023	0.005	0.004*	0.010	0.006*	<0.009	<0.007	<0.01	<0.01
稲 (玄米) 2001年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G</sup> + 200 <sup>G</sup> ×3	4	7	0.02	0.01*								
			4	14	0.02	0.01*								
			4	21~22	<0.01	<0.01								
稲 (玄米) 2002、2003年	13	0.4g ai/箱 <sup>SP+</sup> 1.25g ai/箱 <sup>G+</sup> 40~60 <sup>SP</sup> ×3or 60~67 <sup>SC</sup> ×3or 67 <sup>SC</sup> ×4or 200 <sup>G</sup> ×3or200 <sup>D</sup> ×3	5~	7	0.55	0.10*								
			6 <sup>a</sup>	14	0.16	0.08*								
				20~21	0.16	0.07*								
				28	0.17	0.06*								
稲 (玄米) 2005年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 40 <sup>SC</sup> ×3	4	14	0.15	0.13								
			4	21	0.18	0.14								
稲 (玄米) 2006年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 56 <sup>SC</sup> ×3	4	7	0.12	0.12								
			4	14	0.10	0.10								
			4	21	0.16	0.16								
稲 (玄米) 2007年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 56 <sup>SC</sup> ×3	4	7	0.10	0.10								
			4	14	0.10	0.10								
			4	21	0.14	0.14								
			4	45	0.06	0.06								
稲 (玄米) 2008年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 100 <sup>SC</sup> ×3	4	7	0.18	0.18								
			4	14	0.25	0.24								
			4	21	0.15	0.14								
			4	42	0.02	0.02								
稲* (玄米) 1998-2002年	2	1.0 g ai/箱 <sup>G</sup> 750 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	1	125-146	<0.005	<0.005								
			3	20-21	0.030	0.019								
			3	6-7	0.069	0.045								
			3	13-14	0.079	0.049								
			3	20-21	0.056	0.040								
稲* (玄米) 2007年	2	4.0 g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 98 <sup>SC</sup> ×2	4	7	0.085	0.055								
			4	14	0.074	0.048								
			4	21	0.062	0.052								
4	28	0.074	0.072											
稲* (玄米) 2006年	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 65 <sup>SC</sup> ×2	4	7	0.025	0.024								
			4	14	0.031	0.030								
			4	21	0.054	0.054								
稲* (玄米) 2007年	1	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 65~78 <sup>SC</sup> ×2	4	7	0.025	0.024								
			4	14	0.022	0.022								
			4	21	0.039	0.038								
			4	28	0.034	0.034								

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)										
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
稲* (玄米) 2008年	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 98 <sup>SC</sup> ×2	3	7	0.031	0.030									
			3	14	0.035	0.034									
			3	21	0.069	0.068									
			3	28	0.089	0.088									
			3	35	0.044	0.044									
3	42	0.046	0.046												
稲* (玄米) 2008年	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 65 <sup>SC</sup> ×2	3	7	0.024	0.024									
			3	14	0.023	0.022									
			3	21	0.044	0.044									
			3	28	0.046	0.046									
			3	35	0.039	0.038									
3	42	0.037	0.037												
稲 (玄米) 2010年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 100 <sup>WP</sup> ×3 <sup>a</sup>	4	7	0.23	0.17									
			4	14	0.20	0.16									
			4	21	0.24	0.19									
			4	28	0.15	0.10									
稲 (稲わら) 1998年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G</sup> + 60 <sup>SP</sup> ×3	4	13~14	0.139	0.11	0.03	0.02*	0.02	0.02*	<0.02	<0.02	0.38	0.21	
			4	20~21	0.094	0.08	0.02	0.01*	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.16	0.10
			4	27~28	0.070	0.05	<0.02	<0.01	0.02	0.02*	<0.02	<0.02	0.23	0.12	
稲 (稲わら) 1998年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G+</sup> 100 <sup>G</sup> ×3	4	13~14	0.179	0.12	0.04	0.02*	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.33	0.07*	
			4	20~21	0.118	0.08*	<0.02	<0.01	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.10	0.03*	
			4	27~28	0.092	0.05	<0.02	<0.01	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.04	0.02*	
稲 (稲わら) 1998年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G+</sup> 60 <sup>D</sup> ×3	4	13~14	0.159	0.11	<0.02	<0.01	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.12	0.05*	
			4	20~21	0.10	0.08	0.03	0.02*	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.16	0.05*	
			4	27~28	0.053	0.04	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	<0.02	0.21	0.09*	
稲 (稲わら) 2001年	2	1.25 g ai/箱 <sup>G</sup> + 200 <sup>G</sup> ×3	4	7	1.25	0.95*									
			4	14	0.73	0.43*									
			4	21~22	0.23	0.18*									
稲 (稲わら) 2002、2003年	13	0.4g ai/箱 <sup>SP+</sup> 1.25g ai/箱 <sup>G+</sup> 40~60 <sup>SP</sup> ×3or 60~67 <sup>SC</sup> ×3or 67 <sup>SC</sup> ×4or 200 <sup>G</sup> ×3or200 <sup>D</sup> ×3	5~	7	3.89	1.26									
			6 <sup>a</sup>	14	2.78	0.86									
				20~21	2.18	0.59									
				28	0.84	0.27*									
稲 (稲わら) 2005年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 40 <sup>SC</sup> ×3	4	14	0.70	0.40									
			4	21	0.19	0.10									
稲 (稲わら) 2006年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 56 <sup>SC</sup> ×3	4	7	1.42	1.39									
			4	14	0.99	0.98									
			4	21	0.54	0.51									
稲 (稲わら) 2007年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 56 <sup>SC</sup> ×3	4	7	2.51	2.48									
			4	14	1.36	1.33									
			4	21	0.50	0.50									
			4	45	0.03	0.03									
稲 (稲わら) 2008年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 100 <sup>SC</sup> ×3	4	7	1.28	1.24									
			4	14	0.62	0.60									
			4	21	0.07	0.07									
			4	42	0.03	0.03									
稲* (稲わら) 1998-2002年	2	1.0 g ai/箱 <sup>G</sup>	1	125-146	<0.04	<0.03									
	2	1.0g ai/箱 <sup>G</sup> 750 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	3	20-21	<0.04	<0.03									
	2	1.0g ai/箱 <sup>G</sup> 75 <sup>G</sup>	3	6-7	0.04	0.035*									
	3	13-14	<0.04	0.03*											
3	20-21	<0.04	<0.03												
2	1.0g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 30 <sup>SC</sup>	4	7	0.07	0.048										
4	14	0.06	0.040												
4	21	0.04	0.028*												



作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
稲* (稲わら) 2007年	2	4.0 g ai/箱 <sup>G</sup>	1	122-134	<0.02	<0.02								
	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 98 <sup>SC</sup> ×2	4	7	0.11	0.11								
			4	14	0.03	0.03								
			4	21	0.02	0.02								
4			28	0.02	0.02									
稲* (稲わら) 2006年	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 65 <sup>SC</sup> ×2	4 4 4	7 14 21	0.08 0.06 0.03	0.08 0.06 0.03								
稲* (稲わら) 2007年	1	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 65~78 <sup>SC</sup> ×2	4 4 4 4	7 14 21 28	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02 <0.02								
稲* (稲わら) 2008年	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 98 <sup>SC</sup> ×2	3 3 3 3 3 3	7 14 21 28 35 42	0.030 0.021 0.020 <0.016 <0.016 <0.016	0.030 0.021 0.020 <0.016 <0.016 <0.016								
稲* (稲わら) 2008年	2	4.0g ai/箱 <sup>G</sup> 65 <sup>SC</sup> ×2	3 3 3 3 3 3	7 14 21 28 35 42	2.85 0.95 0.32 0.16 0.09 0.12	2.72 0.94 0.31 0.16 0.08 0.12								
稲 (稲わら) 2010年	2	0.75 g ai/箱 <sup>G</sup> 100 <sup>WP</sup> ×3 <sup>a</sup>	4 4 4 4	7 14 21 28	2.02 0.51 0.36 0.08	1.09 0.29 0.21 0.04								
とうもろこし * (乾燥子実) 2009年	2	1.8 <sup>SC</sup> g ai/kg(種子)	1	126~ 139	<0.004	<0.004								
未成熟とうも ろこし (生食用子実) 2005年	2	150-200 <sup>SP</sup>	3 3 3	3 7 14	0.01 <0.01 0.01	0.01 <0.01 0.01								
未成熟とうも ろこし* (生食用子実) 2004年	2	100-150 <sup>SG</sup>	2 2 2	7 21 42	<0.005 <0.005 <0.005	<0.005 <0.005 <0.005								
未成熟とうも ろこし* (子実) 2009年	2	1.8 <sup>SC</sup> g ai/kg(種子)	1	83~101	<0.004	<0.004								
だいで (乾燥子実) 2003年	2	300 <sup>G</sup> + 120 <sup>SP</sup> ×3~4	4~ 5 <sup>a</sup>	7 13~14 21	0.01 <0.01 <0.01	0.01* <0.01 <0.01								
だいで (乾燥子実) 2003年	2	300 <sup>G</sup> + 200 <sup>D</sup> ×3	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	7 13~14 20~21	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01								
だいで (乾燥子実) 2004年	2	300 <sup>G</sup> + 160-200 <sup>SC</sup> ×3	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	7 14 21	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01								

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
だいず (乾燥子実) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 66.6・96 <sup>SC</sup> ×3	4 <sup>a</sup>	7	<0.01	<0.01	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	13	<0.01	<0.01								
			4 <sup>a</sup>	20~21	<0.01	<0.01								
			4 <sup>a</sup>	28	<0.01	<0.01								
だいず* (乾燥子実) 2003年*	2	75・150 <sup>SG</sup>	2	6・7	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	13・14	<0.005	<0.005								
			2	21	<0.005	<0.005								
	2	0.4 <sup>SC</sup> g ai/kg(種子) 300 <sup>G</sup> 75・150 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	6・7	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	13・14	<0.005	<0.005								
			4 <sup>a</sup>	21	<0.005	<0.005								
あずき (乾燥子実) 2004年	2	300 <sup>G</sup> + 120~240 <sup>SP</sup> ×3	4 <sup>a</sup>	7	0.09	0.05	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	14	0.08	0.05								
			4 <sup>a</sup>	21	0.03	0.03								
あずき* (乾燥子実) 2006年	2	1.8 <sup>SC</sup> g ai/kg(種子) + 50~100 <sup>SP</sup> ×2	1	126	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	1	0.010	0.010								
			3	7	0.019	0.018								
			3	14	0.009	0.008								
いんげん まめ (乾燥子実) 2004年	2	300 <sup>G</sup> + 120~195 <sup>SP</sup> ×3	4 <sup>a</sup>	7	0.02	0.01*	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	14	0.02	0.01*								
			4 <sup>a</sup>	21	0.01	0.01*								
いんげん まめ* (乾燥子実) 2001年	2	100 <sup>SG</sup>	3	7	0.050	0.025*	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	14	0.040	0.022*								
いんげん まめ* (乾燥子実) 2005年	2	3.6 <sup>SC</sup> g ai/kg(種子) 300 <sup>G</sup> 87.5・100 <sup>SG</sup>	5 <sup>a</sup>	7	<0.01	<0.01	/	/	/	/	/	/	/	/
			5 <sup>a</sup>	14	<0.01	<0.01								
			5 <sup>a</sup>	21	0.01	0.01*								
ばれいしょ (塊茎) 1998年	2	300 <sup>G</sup> + 120 <sup>SP</sup> ×3	4	7	0.009	0.005*	0.002	0.002*	<0.002	<0.002	0.013	0.005*	<0.006	<0.004
			4	14	0.016	0.007*	0.002	0.002*	<0.002	<0.002	0.006	0.004*	0.006	0.004*
			4	21	0.011	0.006*	0.003	0.003*	<0.002	<0.002	0.013	0.006*	<0.006	<0.004
ばれいしょ (塊茎) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 160・200×3 <sup>SC</sup>	4	7	0.01	0.01*	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	14	0.01	0.01*								
			4	21	0.01	0.01*								
ばれいしょ (塊茎) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 400 <sup>SP</sup> ×3	4	7	0.01	0.01*	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	14	0.03	0.02*								
			4	21	0.02	0.02*								
ばれいしょ* (塊茎) 1998年	2	450 <sup>G</sup> 100 <sup>SG</sup>	4	14	0.020	0.010*	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	21	0.014	0.009*								
			4	28	0.013	0.007*								
ばれいしょ* (塊茎) 2005年	2	300 <sup>G</sup> 33.3 <sup>SG</sup>	4	14	0.02	0.01*	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	21	0.02	0.01*								
			4	28	0.01	0.01*								
さといも* (塊茎) 2003年	2	300 <sup>G</sup>	2 <sup>a</sup>	30	<0.01	<0.008	/	/	/	/	/	/	/	/
			2 <sup>a</sup>	37	<0.01	<0.008								
			2 <sup>a</sup>	45	<0.01	<0.008								
	2	125 <sup>SG</sup>	2 <sup>a</sup>	7	<0.01	<0.008								
			2 <sup>a</sup>	14	<0.01	<0.008								
			2 <sup>a</sup>	21	<0.01	<0.008								
2	300 <sup>G</sup> 75 <sup>SC</sup>	3 <sup>a</sup>	7	<0.01	<0.008									
		3 <sup>a</sup>	14	<0.01	<0.008									
		3 <sup>a</sup>	21	<0.01	<0.008									
かんしょ (塊根) 2002年	2	450 <sup>G</sup>	1	104	<0.01	<0.01	/	/	/	/	/	/	/	
			1	116	<0.01	<0.01								

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
かんしょ* (塊根) 1998年	2	450 <sup>G</sup>	1	112-117	<0.005	<0.005								
	2	450 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup>	3 <sup>a</sup>	21	<0.005	<0.005								
			3 <sup>a</sup>	28	<0.005	<0.005								
3 <sup>a</sup>	42	<0.005	<0.005											
やまのいも* (塊茎) 2007年	2	450 <sup>G</sup> 42~100 <sup>SG</sup>	4	7	<0.005	<0.005								
			4	14	<0.005	<0.005								
			4	21	<0.005	<0.005								
こんにゃく (球茎) 2008年	1	300 <sup>SP</sup>	2	14	<0.05	<0.05								
			2	28	<0.05	<0.05								
			2	42	<0.05	<0.05								
こんにゃく (球茎) 2008年	1	300 <sup>SP</sup>	4	14	<0.05	<0.05								
			4	28	<0.05	<0.05								
			4	42	<0.05	<0.05								
こんにゃく* (塊根) 2005年	2	300 <sup>G</sup>	1	132-145	<0.01	<0.01								
			1	139-152	<0.01	<0.01								
			1	146-159	<0.01	<0.01								
てんさい (根部) 2001年	2	1.6/冊	1	160-161	<0.01	<0.01								
			1	167-168	<0.01	<0.01								
			1	174-175	<0.01	<0.01								
てんさい (根部) 2004年	2	0.9×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>SC</sup>	1	184-199	<0.01	<0.01								
てんさい* (根部) 2000年	2	2 g ai/冊 <sup>SG</sup>	1	150-156	<0.005	<0.005								
			1	157-163	<0.005	<0.005								
			1	164-170	<0.005	<0.005								
さとうきび (茎) 2005年	2	300 <sup>G</sup>	1	259-302	<0.005	<0.005								
さとうきび (茎) 2010年	2	300 <sup>G</sup> + 200~240 <sup>SC</sup> ×3	4	28	0.17	0.09*								
			4	42	0.18	0.09*								
			4	56	0.02	0.02								
さとうきび (茎) 2010、2011年	2	300 <sup>G</sup> + 450 <sup>G</sup> ×3	4	28	0.07	0.04								
			4	42	0.06	0.05								
			4	56	0.15	0.09								
			4	70	0.07	0.07								
			4	90	0.09	0.08								
4	120	0.02	0.02											
だいこん (根部) 1997年	2	300 <sup>G</sup> + 120~160 <sup>SP</sup> ×2	3	7	0.014	0.010*								
			3	14	0.016	0.010								
だいこん* (根部) 2002年	2	3.0×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>WP</sup>	1	66	<0.005	<0.005								
			1	73	<0.005	<0.005								
			1	80	<0.005	<0.005								
	2	3.0×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>WP</sup> 300 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	7	<0.005	<0.005								
			4 <sup>a</sup>	14	<0.005	<0.005								
			4 <sup>a</sup>	21	<0.005	<0.005								
5 <sup>a</sup>	7	<0.005	<0.005											
5 <sup>a</sup>	14	<0.005	<0.005											
5 <sup>a</sup>	21	<0.005	<0.005											
だいこん* (根部) 2004年	2	2.0×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>WP</sup> 300 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	7	<0.005	<0.005								
			4 <sup>a</sup>	14	<0.005	<0.005								
			4 <sup>a</sup>	21	<0.005	<0.005								
			4 <sup>a</sup>	28	<0.005	<0.005								
だいこん (葉部) 1997年	2	300 <sup>G</sup> + 120~160 <sup>SP</sup> ×2	3	7	2.29	1.46								
			3	14	0.49	0.30								
だいこん* (葉部) 2002年	2	3.0×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>WP</sup>	1	66	<0.005	<0.005								
			1	73	0.006	0.005*								
			1	80	<0.005	<0.005								

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
	2	3.0×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>WP</sup> 300 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	7	0.254	0.229								
			4 <sup>a</sup>	14	0.204	0.195								
			4 <sup>a</sup>	21	0.110	0.099								
			5 <sup>a</sup>	7	0.138	0.122								
			5 <sup>a</sup>	14	0.078	0.074								
			5 <sup>a</sup>	21	0.061	0.056								
だいこん* (葉部) 2004年	2	2.0×10 <sup>-3</sup> g ai/種子 <sup>WP</sup> 300 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	7	0.134	0.096								
			4 <sup>a</sup>	14	0.020	0.010*								
			4 <sup>a</sup>	21	0.005	0.005*								
			4 <sup>a</sup>	28	0.034	0.018*								
だいこん (つまみ菜) 2001年	1	300 <sup>G</sup>	1	10	0.49	0.48								
だいこん (間引き菜) 2001年	1	300 <sup>G</sup>	1	22	0.15	0.14								
かぶ (根部) 2006年	2	300 <sup>G</sup> + 24~240 <sup>SP</sup> ×3	1	51~97	0.096	0.096								
			4	3	0.173	0.172								
			4	7	0.197	0.195								
			4	14	0.131	0.127								
			4	21	0.098	0.096								
かぶ* (根部) 2006、2007年	2	300 <sup>G</sup> + 50~150 <sup>SG</sup> ×3	4	1	<0.005	<0.005								
			4	7	<0.005	<0.005								
			4	14	<0.005	<0.005								
かぶ (葉部) 2006年	2	300 <sup>G</sup> + 24~240 <sup>SP</sup> ×3	1	51~97	0.59	0.058								
			4	3	27.9	27.4								
			4	7	19.1	19.0								
			4	14	25.9	25.4								
			4	21	10.5	10.3								
かぶ* (葉部) 2006、2007年	2	300 <sup>G</sup> + 50~150 <sup>SG</sup> ×3	4	1	0.51	0.50								
			4	7	0.55	0.55								
			4	14	0.27	0.26								
はくさい (茎葉) 2007年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 240 <sup>SP</sup> ×2	3	3	0.96	0.94								
			3	7	0.85	0.85								
			3	14	0.26	0.26								
はくさい (茎葉) 2003年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160~200 <sup>SP</sup> ×2	1	46~54	0.17	0.06*								
			3	3	0.20	0.10								
			3	7	0.14	0.05								
			3	14	0.04	0.02*								
はくさい* (茎葉) 2001年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup>	1	48	<0.005	<0.005								
			1	55	<0.005	<0.005								
			1	62	<0.005	<0.005								
			1	67	<0.005	<0.005								
			1	74	<0.005	<0.005								
			1	81	<0.005	<0.005								
	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 40-66.6 <sup>SG</sup>	4	3	0.021	0.013*								
			4	7	0.009	0.006*								
			4	14	0.010	0.007*								
			4	21	0.007	0.006*								
キャベツ (葉球) 2002年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 320~480 <sup>SP</sup>	3	3	0.20	0.12								
			3	7	0.11	0.08								
			3	13~14	0.08	0.04								
キャベツ* (葉球) 2000年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 100 <sup>SG</sup>	4	3	0.030	0.012*								
			4	7	0.022	0.009*								
			4	14	0.012	0.007*								
こまつな (茎葉) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 120~140 <sup>SP</sup> ×3	4	3	3.70	3.64								
			4	7	3.35	3.28								
			4	14	1.60	1.60								

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)										
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
こまつな* (茎葉) 2003年	2	100-350 <sup>SG</sup>	2	3	0.36	0.219	/	/	/	/	/	/	/	/	
			2	7	0.22	0.134									
			2	14	0.114	0.081									
	2	300 <sup>G</sup> 100-350 <sup>SG</sup>	3	3	0.40	0.256									
			3	7	0.34	0.206									
			3	14	0.14	0.096									
みずな (茎葉) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 32-182 <sup>SP</sup> ×3	4 <sup>a</sup>	7	2.47	1.76	/	/	/	/	/	/	/	/	
			4 <sup>a</sup>	14	0.81	0.74									
みずな* (茎葉) 2004年	2	300 <sup>G</sup> 92.6-150 <sup>SG</sup>	3 <sup>a</sup>	3	0.18	0.13	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			3 <sup>a</sup>	7	0.05	0.05									
			3 <sup>a</sup>	14	<0.05	<0.05									
チゲンサイ (茎葉) 2005年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160-240 <sup>SP</sup> ×3	1	34-49	0.49	0.26*	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	14	0.85	0.50									
チゲンサイ* (茎葉) 2004年	2	0.075g/1L 培土 <sup>G</sup> 300 <sup>G</sup> 100-125 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	3	0.33	0.17	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	7	0.31	0.16									
			4 <sup>a</sup>	14	0.19	0.12									
カリフラワー <sup>a</sup> (花蕾) 2008年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 215~240 <sup>SP</sup> ×3	4	3	0.90	0.90	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	7	0.17	0.16									
			4	14	0.07	0.06									
			4	21~22	0.07	0.07									
カリフラワー* (花蕾) 2006年	2	0.005 g ai/株 <sup>G</sup> + 300 <sup>SG</sup> ×3	4	7	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	14	<0.005	<0.005									
			4	21	<0.005	<0.005									
ブロッコリー (花蕾) 2004年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160 <sup>SP</sup> ×3	1	71~151	0.04	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4 <sup>a</sup>	3	0.33	0.20									
			4 <sup>a</sup>	7	0.30	0.17									
			4 <sup>a</sup>	14	0.05	0.03									
ブロッコリー* (花蕾) 2001年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup>	1	56-59	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			1	58-61	<0.005	<0.005									
			1	62-65	<0.005	<0.005									
	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 100 <sup>SG</sup>	4	1	0.087	0.049	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	3	0.082	0.042									
			4	7	0.065	0.038									
4	14	0.014	0.010*												
はなっこりー (茎葉、茎) 2007年	2	300 <sup>G</sup> + 240 <sup>WP</sup> ×2	3	1	0.70	0.67	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	3	0.40	0.35									
			3	7	0.17	0.11									
			3	14	0.06	0.04									
しゅんぎく (茎葉) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 160~240 <sup>SP</sup> ×3	4	3 <sup>a</sup>	3.63	1.95	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	7 <sup>a</sup>	1.94	1.05									
			4	14	0.65	0.33									
しゅんぎく* (茎葉) 2006年	2	0.005 g ai/株 <sup>G</sup> + 300 <sup>SG</sup> ×3	4	3	0.243	0.240	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	7	0.217	0.216									
			4	14	0.098	0.098									
レタス (茎葉) 2002年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160~240 <sup>SP</sup> ×2	1	52~66	0.27	0.16	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			3 <sup>a</sup>	3	1.34	0.92									
			3 <sup>a</sup>	7	1.05	0.69									
			3 <sup>a</sup>	14	0.27	0.22									
レタス* (茎葉) 2000年	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup> 125-150 <sup>SG</sup>	3	7	0.021	0.015	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	14	0.025	0.015									
リーフレタス (茎葉) 2004年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160~190 <sup>SP</sup> ×2	1	45~52	0.07	0.04*	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			3 <sup>a</sup>	3	8.15	6.85									
			3 <sup>a</sup>	7	3.87	2.26									
			3 <sup>a</sup>	14	0.30	0.18									
リーフレタス* (茎葉)	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup>	1	61-62	<0.05	<0.05	/	/	/	/	/	/	/	/	/
			1	65-66	<0.05	<0.05									
			1	72-73	<0.05	<0.05									

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)																
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG								
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値							
2004年	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup> 100-150 <sup>SG</sup>	3 3	7 14	0.10 0.07	0.08 0.06*															
サラダ菜 (茎葉) 2004年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 120~160 <sup>SP</sup> ×2	1 3 <sup>a</sup> 3 <sup>a</sup> 3 <sup>a</sup>	32~41 3 7 14	1.02 10.4 4.73 1.02	0.57 6.86 3.75 0.88															
サラダ菜* (茎葉) 2004年	1	0.005g ai/株 <sup>G</sup>	1 1 1 1 1	42 46 53 59 63 70	<0.05 <0.05 <0.05 <0.05 <0.05 <0.05	<0.05 <0.05 <0.05 <0.05 <0.05 <0.05															
	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup> 150 <sup>SG</sup>	3 3	7 14	0.10 0.09	0.10 0.08															
ねぎ (茎葉) 2001年	2	300 <sup>G</sup> ×5	5 <sup>a</sup> 5 <sup>a</sup> 5 <sup>a</sup>	3 7 14	0.14 0.13 0.10	0.07 0.08 0.05															
ねぎ (茎葉) 2001年	2	300 <sup>G</sup> + 120~160 <sup>SP</sup> ×4	5 <sup>a</sup> 5 <sup>a</sup> 5 <sup>a</sup>	3 7 14	0.14 0.12 0.02	0.09 0.06 0.02															
ねぎ* (茎葉) 2001年	2	45 <sup>G</sup>	1 1 1 1 1 1	69 77 84 117 124 131	0.023 0.014 0.006 0.022 0.008 0.010	0.018 0.014 0.006 0.016 0.006* 0.008*															
	2	45g ai/株 <sup>G</sup> 200 <sup>SG</sup>	4 4 4 4	3 6-7 14 21	0.078 0.054 0.032 0.017	0.051 0.039 0.024 0.012															
ねぎ (茎葉) 2011年	2	300 <sup>G</sup> + 144~152 <sup>SP</sup> ×3	4 4 4 4 4 4	1 <sup>a</sup> 3 7 14 21 28	0.55 0.34 0.21 0.02 0.03 <0.01	0.50 0.19 0.12 0.02 0.02* 0.01*															
にら (茎葉) 2004年	2	160 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	3 7 14	6.18 4.97 2.37	3.40 2.16 1.00															
にら (花茎) 2009年	2	80 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	1 3 7	0.33 0.28 0.17	0.26 0.24 0.13															
にら* (茎葉) 2006、2007年	3	300 <sup>G</sup> + 100~115 <sup>SG</sup> ×3	4 4 4 4	1 <sup>a</sup> 7 <sup>a</sup> 14 21	1.17 0.97 0.68 0.20	1.16 0.96 0.67 0.20															
アスパラガス (若茎) 2004年	2	240 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	1 3 7	0.24 0.06 <0.01	0.15 0.04 <0.01															
アスパラガス* (若茎) 2006年	2	150 <sup>SG</sup> ×3	3 3 3	1 3 7	0.014 0.007 <0.005	0.014 0.006 <0.005															
わけぎ (茎葉) 2005年	2	300 <sup>G</sup> ×5	5 5 5	3 7 14	0.13 0.11 0.11	0.13 0.11 0.10															
わけぎ (茎葉) 2005年	2	168~300 <sup>G</sup> ×5	5 5 5	3 7 14	2.06 0.20 0.10	2.02 0.20 0.10															

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
わけぎ* (茎葉) 2005年	2	450 <sup>G</sup>	1	23	0.06	0.06*								
			1	30	<0.05	<0.05								
			1	36	<0.05	<0.05								
			1	63	<0.05	<0.05								
			1	70	<0.05	<0.05								
	1	77	<0.05	<0.05										
2	450 <sup>G</sup> 100-150 <sup>SG</sup>	5 <sup>a</sup>	3	0.20	0.14									
5 <sup>a</sup>	7	0.21	0.14											
5 <sup>a</sup>	14	0.14	0.10*											
あさつき (茎葉) 2005年	2	300 <sup>G</sup> ×5	5	3	0.70	0.68								
			5	7	0.97	0.96								
			5	14	0.84	0.83								
あさつき (茎葉) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 120 <sup>SP</sup> ×4	5	3	1.39	1.37								
			5	7	1.10	1.09								
			5	14	0.32	0.32								
あさつき* (可食部) 2006年	2	450 <sup>G</sup>	1	23	<0.05	<0.05								
			1	30	<0.05	<0.05								
			1	36	<0.05	<0.05								
			1	46	<0.05	<0.05								
			1	53	<0.05	<0.05								
	1	60	<0.05	<0.05										
2	450 <sup>G</sup> 75 <sup>SG</sup>	5 <sup>a</sup>	3	0.18	0.12									
5 <sup>a</sup>	7	0.14	0.10*											
5 <sup>a</sup>	14	0.18	0.12*											
らっきょう (鱗茎) 2008年	2	300 <sup>G</sup> ×2	2	21	<0.2	<0.2								
			2	30	<0.2	<0.2								
			2	60	<0.2	<0.2								
にんじん* (根部) 2004年	1	600 <sup>G</sup>	1	61	0.011	0.010								
			1	68	0.010	0.010								
			1	75	0.007	0.006								
	1	91	0.006	0.006										
	1	98	0.005	0.005										
	1	105	0.006	0.006										
2	600 <sup>G</sup> 450 <sup>G</sup>	2	14	0.033	0.032									
		2	28	0.022	0.022									
		2	42	0.024	0.024									
		2	56	0.025	0.025									
パセリ (茎葉) 2006年	2	80~100 <sup>G</sup>	1	14	7.61	7.44								
			1	21	1.71	1.70								
			1	28	0.37	0.36								
セルリー (茎葉) 2006年	2	300 <sup>G</sup> + 200~240 <sup>SP</sup> ×3	1	75~105	0.24	0.24								
			4	3	4.04	3.90								
			4	7	3.46	3.42								
			4	14	1.66	1.62								
			4	21	1.50	1.48								
セルリー* (茎葉) 2004年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup>	2	75	<0.1	<0.07								
			2	82	<0.1	<0.07								
			2	89	<0.1	<0.07								
			2	98	<0.1	<0.07								
			2	105	<0.1	<0.07								
			2	112	<0.1	<0.07								
みつば (茎葉) 2005年	2	80~200 <sup>SP</sup> ×3	3	3	10.6	10.5								
			3	7	8.41	8.35								
			3	14	3.75	3.70								
トマト (果実) 1998年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 200 <sup>SP</sup> ×3	4	1	0.229	0.156	0.011	0.006*	0.004	0.002*	0.008	0.006*	0.006	0.004*
			4	3	0.229	0.136	0.009	0.005*	0.002	0.002*	0.008	0.006*	<0.006	<0.004
			4	7	0.229	0.133	0.010	0.005*	0.003	0.002*	0.008	0.006*	0.006	0.004*
トマト (果実) 2005、2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> ×4	4	1	0.02	0.02								
			4	7	0.01	0.01								
			4	21	<0.01	<0.01								

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
トマト (果実) 2009年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160-240 <sup>SC</sup> ×3	4	1	0.26	0.19								
			4	3	0.25	0.17								
			4	7	0.23	0.15								
			4	14	0.17	0.13								
			4	28	0.07	0.06								
トマト* (果実) 1999、2000年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 66.6-100S <sup>G</sup>	1	44-56	<0.005	<0.005								
			3	1	0.019	0.013								
			4	1	0.038	0.026								
			4	3	0.027	0.021								
			4	7	0.022	0.017								
ミニトマト (果実) 2003、2004年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> 240-320 <sup>SP</sup> ×3	1	77-98	<0.05	<0.03								
			4	1	0.91	0.90								
			4	7	0.72	0.71								
			4	4	0.66	0.64								
ミニトマト (果実) 2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> ×4	4	1	0.01	0.01								
			4	7	<0.01	<0.01								
			4	21	<0.01	<0.01								
ミニトマト* (果実) 2004年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 150-180S <sup>G</sup>	1	60-72	0.02	0.02*								
			2	1	0.07	0.06								
			2	7	0.10	0.09								
			2	14	0.08	0.06								
			3	1	0.15	0.14								
			3	7	0.19	0.17								
ピーマン (果実) 2002年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 120~160 <sup>SP</sup> ×2	1	62	0.01	0.01*								
			3	1	1.22	1.02								
			3	3	1.07	0.78								
			3	7	0.79	0.51								
ピーマン* (果実) 1999年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 60-100S <sup>G</sup>	1	42	0.008	0.008								
			1	82	<0.005	<0.005								
			3	1	0.044	0.026								
			4	1	0.056	0.040								
			4	3	0.052	0.034								
なす (果実) 1997年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 130~160 <sup>SP</sup> ×3	4	1	0.396	0.307	0.004	0.002*	0.006	0.004	0.015	0.009	<0.006	0.004*
4	3	0.293	0.234	0.003	0.002*	0.005	0.005	0.015	0.010	0.010	0.010	0.022	0.008*	
4	7	0.205	0.140	0.004	0.003*	0.007	0.005	0.013	0.009	0.009	<0.006	0.004*		
なす (果実) 2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> ×4	4	1	0.01	0.01								
			4	7	<0.01	<0.01								
			4	14	0.01	0.01								
			4	14	0.01	0.01								
なす (果実) 2009年	2	0.005 g ai/株 <sup>G</sup> + 160~240 <sup>SC</sup> ×3	4	1	0.16	0.14								
			4	3	0.14	0.13								
			4	7	0.07	0.06								
			4	14	0.04	0.03								
			4	28	0.01	0.01*								
なす* (果実) 1998年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 66.6-125S <sup>G</sup>	1	97-108	<0.005	<0.005								
			3	1	<0.005	<0.005								
			4	1	<0.005	<0.005								
			4	3	<0.005	<0.005								
			4	7	<0.005	<0.005								
ししとう (果実) 2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 240 <sup>SP</sup> ×3	4	55~58	<0.01	<0.01								
			4	1	2.96	2.93								
			4	3	2.51	2.47								
			4	7	1.75	1.68								
ししとう* (果実、へた を除く) 2004年	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup> 50-83.3S <sup>G</sup>	4	1	0.04	0.04								
			4	3	0.08	0.06								
			4	7	0.04	0.04								



作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)										
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
とうがらし (果実) 2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 240 <sup>SP</sup> ×3	1	58~89	0.01	0.01									
			4		2.40	2.38									
			4		2.14	2.10									
			4		1.51	1.50									
とうがらし* (果実、へた を除く) 2006年	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup> 50-100 <sup>SG</sup>	4	1	0.17	0.09									
			4		0.16	0.09									
			4		0.14	0.08									
きゅうり (果実) 1997年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160~240 <sup>SP</sup> ×3	4	1	0.705	0.410									
			4		0.399	0.272									
			4		0.356	0.172									
きゅうり (果実) 2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> ×4	4	1	0.06	0.06									
			4		0.09	0.09									
			4		0.05	0.05									
きゅうり (果実) 2009年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160~198 <sup>SC</sup> ×3	4	1	0.22	0.18									
			4		0.16	0.13									
			4		0.05	0.04									
			4		0.02	0.02*									
きゅうり* (果実) 1998年	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup>	1	34-43	<0.005	<0.005									
	2	69.3-83.3 <sup>SG</sup>	2		1	0.006									0.005
	2	0.005g ai/株 <sup>G</sup> 75-104 <sup>SG</sup>	3		1	0.010									0.008
			4		1	0.008									0.007
かぼちゃ (果実) 2006年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160 <sup>SP</sup> ×3	4	1	0.17	0.17									
			4		0.06	0.06									
			4		0.09	0.08									
すいか (果実) 1998年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 200~240 <sup>SP</sup> ×3	4	1	0.023	0.010									
			4		0.012	0.008*									
			4		0.012	0.008*									
すいか* (果実) 2000年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 38-136.2 <sup>SG</sup>	4	1	0.007	0.006*									
			4		0.007	0.006*									
			4		0.007	0.006*									
メロン (果実) 1998年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 200~240 <sup>SP</sup> ×3	4	1	0.031	0.018									
			4		0.039	0.023									
			4		0.028	0.018									
メロン (果実) 2006、2007年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> ×4	4	1	<0.01	<0.01									
			4		0.01	0.01									
			4		0.01	0.01									
メロン* (果実) 1998-2000年	4	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 100-150 <sup>SG</sup>	1	83-87	<0.005	<0.005									
			4		0.005	0.005*									
			4		0.005	0.005*									
			4		0.005	0.005*									
			4		0.008	0.006*									
			4		0.011	0.007									
			4		0.014	0.009									
			4		0.014	0.010									
			3		3	<0.005									<0.005
			3		7	<0.005									<0.005
			3		14	<0.005									<0.005
			とうがん (果実) 2004年		2	204-214 <sup>SP</sup> ×3									3
3	0.20	0.17													
3	0.08	0.07													
にがうり (果実) 2005年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 144-200 <sup>SP</sup> ×3	4 <sup>a</sup>	1	0.28	0.22									
			4 <sup>a</sup>		0.14	0.12									
			4 <sup>a</sup>		0.16	0.11									

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)													
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG					
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値				
にがうり* (果実) 2004年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 50-101 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	7	0.01	0.01*												
食用へちま (果実) 2004年	2	160-288 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	1 3 7	0.22 0.18 0.16	0.15 0.15 0.14												
食用へちま* (果実) 2005年	2	90-100 <sup>SG</sup>	3 3 3	1 3 7	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02												
ほうれんそう (茎葉) 2005年	2	0.01 g ai/株 <sup>G</sup> + 160 <sup>SP</sup> ×3	4 4 4	1 3 7	8.72 27.3 23.3	8.69 27.0 23.2												
ほうれんそう* (茎葉) 2003年	2	75-150 <sup>SG</sup>	2 2 2	3 7 14	0.78 0.67 0.48	0.61 0.52 0.20												
	2	300 <sup>G</sup> 100-150 <sup>SG</sup>	3 3 3	3 7 14	1.21 0.74 0.45	0.84 0.60 0.27												
オクラ (果実) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 80-160 <sup>SP</sup> ×3	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	1 3 7	0.36 0.17 0.09	0.33 0.16 0.06												
オクラ* (果実、へた を除く) 2005年	2	75-105 <sup>SG</sup>	3 3 3	1 3 7	<0.01 0.01 <0.01	<0.01 0.01* <0.01												
さやえんどう (さや) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 160~182 <sup>SP</sup> ×3	4 4 4	3 7 14	0.87 0.42 0.22	0.86 0.41 0.22												
未えんどう* (子実) 2006年	2	150 <sup>SG</sup>	3 3 3	1 <sup>a</sup> 3 <sup>a</sup> 7	0.040 0.026 <0.025	0.040 0.026 <0.025												
さやいんげん (さや) 2005年	2	300 <sup>G</sup> + 120~200 <sup>SP</sup> ×3	4 4 4	1 <sup>a</sup> 3 7	0.42 0.34 0.10	0.41 0.34 0.10												
未成熟 いんげん* (さや) 2001年	2	50-100 <sup>SG</sup>	3 3 3	1 7 14	0.119 0.051 0.013	0.090 0.043 0.010												
えだまめ (さや) 2004年	2	300 <sup>G</sup> + 160~240 <sup>SP</sup> ×3	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	3 7 14	0.69 0.18 0.04	0.69 0.18 0.04												
えだまめ (さや) 2006年	2	300 <sup>G</sup> + 200~250 <sup>Da</sup> ×3	4 4 4	1 7 14 28	0.48 0.04 <0.01 <0.01	0.47 0.04 <0.01 <0.01												
えだまめ* (さや) 2003年	2	100-200 <sup>SG</sup>	2 2 2	7 14 21	0.022 0.012 <0.005	0.018 0.008* <0.005												
	2	0.4g ai/kg(種子) <sup>SC</sup> 300 <sup>G</sup> 100-200 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	7 14 21	0.029 0.017 0.008	0.023 0.010* 0.006												
れんこん (塊茎) 2004年	2	600 <sup>G</sup> + 600 <sup>G</sup> ×3	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	7 14 21	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01												

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)												
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG				
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値			
れんこん (塊茎) 2005年	2	600 <sup>G</sup> + 160-240 <sup>SP</sup>	4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup> 4 <sup>a</sup>	7 14 21	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01											
れんこん* (塊茎) 2002年	4	300 <sup>G</sup>	2 2 2 2 3 3 3 3	14 21 28 35 14 21 28 35	<0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005	<0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005 <0.005											
みょうが (花穂) 2006年	1	280 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	1 7 14	<0.05 <0.05 <0.05	<0.05 <0.05 <0.05											
みょうが* (花穂) 2004年	2	150 <sup>SG</sup>	3 3 3	1 3 7	<0.02 <0.02 <0.02	<0.02 <0.02 <0.02											
エンサイ* (茎葉) 2004年	2	100 <sup>SG</sup>	3	14	0.04	0.03*											
うこぎ* (茎葉) 2004年	2	500 <sup>SG</sup>	2 2 2	3 7 14	<0.2 <0.2 <0.2	<0.2 <0.2 <0.2											
モロヘイヤ* (茎葉) 2006年	2	100-106 <sup>SG</sup>	3 3 3	3 <sup>a</sup> 7 14	0.91 0.43 0.15	0.88 0.43 0.14											
セージ* (茎葉) 2005年	2	100 <sup>SG</sup>	3	21	0.12	0.09											
温州みかん (果肉) 1998年	2	320 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	7 14 21	0.248 0.224 0.138	0.119 0.121 0.083	0.003 0.005 0.007	0.002* 0.004* 0.004*	<0.003 0.004 <0.003	<0.003 0.003* <0.003	0.019 0.021 0.032	0.009 0.011* 0.013*	<0.006 <0.006 <0.006	0.004* 0.004* 0.004*			
温州みかん (果肉) 2004年	2	1,060-1,780 <sup>SP</sup> 533-640 <sup>SP</sup> ×3	4 4 4	7 14 21	0.07 0.07 0.08	0.04 0.04* 0.04*											
温州みかん* (果肉) 1998-2002年	4 2	250-500 <sup>SG</sup> 250-500 <sup>WDG</sup>	3 3 3 3 2 2 3 3 3 3	14 21 28 21 28 14 21 28 35 14 21 28 35	0.021 0.018 0.022 0.007 0.007 0.008 0.009 0.011 0.011 0.008 0.009 0.011 0.011	0.012* 0.012* 0.012* 0.006* 0.006* 0.006* 0.008 0.008 0.008 0.008* 0.006* 0.008 0.008 0.008*											
温州みかん (果皮) 1998年	2	320 <sup>SP</sup> ×3	3 3 3	7 14 21	3.36 3.11 1.80	1.86 1.73 0.98	0.048 0.05 0.058	0.03 0.03 0.03	0.042 0.05 0.02	0.02* 0.02* 0.01*	0.120 0.099 0.114	0.09 0.07 0.07	0.035 0.037 0.022	0.01* 0.02* 0.01*			
温州みかん (果皮) 2004年	2	1,060-1,780 <sup>SP</sup> 533-640 <sup>SP</sup> ×3	4 4 4	7 14 21	2.10 2.98 2.95	1.35 1.58 1.55											
温州みかん* (果皮) 1998-2002年	4 2	250-500 <sup>SG</sup> 250-500 <sup>WDG</sup>	3 3 3 2 2 3 3 3 3	14 21 28 21 28 14 21 28 35	0.47 0.51 0.52 0.25 0.18 0.37 0.31 0.29 0.24	0.29 0.32 0.28 0.16 0.12 0.29 0.26 0.23 0.21											

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
夏みかん (果肉) 1998年	2	400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.298	0.087	0.016	0.006*	<0.003	<0.003	<0.005	<0.004	0.007	0.005*
			3	14	0.299	0.093	0.010	0.005*	<0.003	<0.003	<0.005	<0.004	0.007	0.005*
			3	21	0.158	0.051*	0.011	0.004*	<0.003	<0.003	<0.005	<0.004	<0.007	<0.005
夏みかん* (果肉) 1998年	2	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.007	0.006*	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.005	0.005	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	42	0.009	0.007	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	49	0.008	0.006	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	60-64	0.010	0.007	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	28	0.005	0.005*	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	42	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	49	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/
2	60-64	<0.005	<0.005	/	/	/	/	/	/	/	/	/		
夏みかん (果皮) 1998年	2	400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	1.91	1.04	0.005	0.004	0.026	0.016	0.034	0.022	0.010	0.008*
			3	14	2.18	1.11	0.008	0.005	0.018	0.013	0.035	0.019	0.009	0.006*
			3	21	1.78	0.90	0.006	0.004	0.053	0.027	0.036	0.020	0.012	0.008*
夏みかん* (果皮) 1998年	2	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.13	0.09	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.12	0.11	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	42	0.13	0.10	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	49	0.14	0.12	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	60-64	0.11	0.09	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	28	0.07	0.05	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	42	0.08	0.06	/	/	/	/	/	/	/	/
			2	49	0.06	0.04	/	/	/	/	/	/	/	/
2	60-64	0.08	0.04	/	/	/	/	/	/	/	/	/		
夏みかん (全果実) 1998年	2	400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.713	0.370	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	14	0.770	0.396	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	21	0.552	0.302	/	/	/	/	/	/	/	/
夏みかん (全果実) 2005年	2	0.8 g ai/樹 <sup>SP</sup> 400~480 <sup>SP</sup> ×3	4	7	0.74	0.35	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	14	0.76	0.42	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	21	0.48	0.35	/	/	/	/	/	/	/	/
夏みかん* (全果実) 2004年	2	300-612 <sup>SG</sup>	3	14	0.01	0.01*	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	21	0.03	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.02	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	45	0.03	0.03	/	/	/	/	/	/	/	/
すだち (果実) 1998年	1	400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.316	0.297	0.035	0.034	0.011	0.010	0.034	0.034	0.022	0.016
			3	14	0.220	0.219	0.028	0.023	0.005	0.005	0.032	0.030	0.010	0.007
			3	21	0.211	0.210	0.023	0.021	0.004	0.004	0.017	0.017	<0.007	<0.007
すだち (果実) 2005年	1	0.08 g ai/樹 <sup>SP</sup> 400~512 <sup>SP</sup> ×3	4	7	0.21	0.20	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	14	0.15	0.15	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	21	0.11	0.11	/	/	/	/	/	/	/	/
すだち* (果実) 1998年	1	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.038	0.038	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.032	0.032	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	42	0.020	0.020	/	/	/	/	/	/	/	/
すだち* (果実) 2004年	1	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.07	0.06	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	21	0.06	0.06	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.06	0.06	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	45	0.05	0.05	/	/	/	/	/	/	/	/
かぼす (果実) 1998年	1	400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.218	0.204	0.008	0.008	<0.003	<0.003	0.011	0.011	<0.007	<0.007
			3	14	0.165	0.164	0.007	0.006	<0.003	<0.003	0.011	0.008	<0.007	<0.007
			3	21	0.156	0.155	0.006	0.006	<0.003	<0.003	0.013	0.013	<0.007	<0.007
かぼす (果実) 2005年	1	0.08 g ai/樹 <sup>SP</sup> 400~512 <sup>SP</sup> ×3	4	7	0.29	0.29	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	14	0.22	0.21	/	/	/	/	/	/	/	/
			4	21	0.10	0.09	/	/	/	/	/	/	/	/
かぼす* (果実) 1998年	1	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.010	0.010	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.009	0.009	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	42	0.006	0.006	/	/	/	/	/	/	/	/
かぼす* (果実) 2004年	1	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.02	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	21	0.02	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	28	0.02	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/
			3	45	0.02	0.02	/	/	/	/	/	/	/	/

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)										
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
ゆず* (果実) 1998年	1	250 <sup>SG</sup>	3	14	0.063	0.063									
			3	28	0.053	0.053									
			3	42	0.048	0.048									
りんご (果実) 1998年	2	400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.166	0.089	0.003	0.002*	0.023	0.010	0.012	0.008	0.015	0.006	
			3	14	0.070	0.043	0.003	0.002*	0.011	0.007*	0.013	0.008	0.010	0.004*	
			3	21	0.081	0.036*	0.003	0.002*	0.008	0.006	0.013	0.008*	0.006	0.004*	
りんご (果実) 2005年	2	280-320 <sup>SP</sup> ×3	3	1	0.15	0.10									
			3	3	0.06	0.05									
			3	7	0.05	0.04									
りんご* (果実) 2000-2002年	2	250-350 <sup>SG</sup>	2	7	0.010	0.007*									
			2	14	0.005	0.005*									
			2	21	0.007	0.006*									
			2	28	<0.005	<0.005									
	2	250-350 <sup>WDG</sup>	2	7	<0.005	<0.005									
			2	14	<0.005	<0.005									
なし (果実) 2001年	2	240~400 <sup>SP</sup> ×3	3	1	0.39	0.24									
			3	6~7	0.28	0.16									
			3	13~14	0.13	0.11									
なし* (果実) 1999-2003年	4	150-200 <sup>SG</sup>	3	1	0.03	0.02*									
			3	3	0.03	0.02*									
			3	7	0.03	0.02*									
			3	14	0.04	0.02*									
			3	21	0.017	0.015									
			3	28	0.014	0.011									
もも (果実) 1998、1999年	2	320 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.125	0.097	0.009	0.004	0.010	0.004*	0.008	0.006	0.006	0.004*	
			3	14	0.125	0.093	0.009	0.005	0.006	0.003*	0.008	0.006*	0.006	0.004*	
			3	21	0.107	0.068	0.008	0.004*	0.007	0.004*	0.008	0.006*	0.006	0.004*	
もも* (果実) 1998-2003年	2	175-200 <sup>SG</sup>	3	14	0.068	0.054									
			3	17-21	0.081	0.045									
			3	24-28	0.081	0.049									
	2	100 g ai/樹 <sup>G</sup>	1	30	<0.02	<0.02									
			3	1	0.10	0.06									
			3	3	0.08	0.06									
もも (果肉) 2007年	2	320~400 <sup>SP</sup> ×3	3	1 <sup>a</sup>	0.22	0.22									
			3	7	0.20	0.20									
			3	14	0.15	0.15									
もも (果肉) 2006年	1	400 <sup>SP</sup> ×3	3	1 <sup>a</sup>	0.27	0.26									
			3	3	0.28	0.28									
			3	7	0.30	0.30									
もも (果皮) 1998、1999年	2	320 <sup>SP</sup> ×3	3	7	2.14	1.29	0.02	0.02*	0.05	0.03	0.06	0.03	0.05	0.03*	
			3	14	0.98	0.65	0.02	0.01*	0.03	0.02*	<0.03	<0.02	0.05	0.02	
			3	21	0.64	0.50	0.02	0.01*	0.04	0.02*	<0.03	<0.02	0.04	0.02*	
もも* (果皮) 1998-2003年	2	175-200 <sup>SG</sup>	3	14	0.27	0.19									
			3	17-21	0.26	0.15									
			3	24-28	0.19	0.12									
	2	100 g ai/樹 <sup>G</sup>	1	30	<0.1	<0.1									
			3	1	0.61	0.42									
			3	3	0.50	0.42									
2	100g ai/樹 <sup>G</sup> 200-250 <sup>SG</sup>	3	7	0.54	0.40										
		3	14	0.40	0.35										

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
もも (果皮) 2007年	2	320~400 <sup>SP</sup> ×3	3	1 <sup>a</sup>	2.84	2.78								
			3	7	2.49	2.48								
			3	14	1.17	1.16								
			3	35	0.60	0.60								
もも (果皮) 2004年	1	400 <sup>SP</sup> ×3	3	1 <sup>a</sup>	5.27	5.24								
			3	3	5.89	5.88								
			3	7	2.97	2.96								
			3											
ネクタリン (果実) 2004年	2	320~400 <sup>SP</sup> ×3	3	3	0.69	0.60								
			3	7	0.59	0.38								
			3	14	0.44	0.29								
あんず <sup>z</sup> (果実) 2004年	2	400~445 <sup>SP</sup> ×3	3 <sup>a</sup>	3	1.08	0.82								
			3 <sup>a</sup>	7	0.72	0.52								
			3 <sup>a</sup>	14	0.47	0.27								
すもも (果実) 2004年	2	320~400 <sup>SP</sup> ×3	3	3	0.06	0.04								
			3	7	0.10	0.05								
			3	14	0.07	0.03								
すもも* (果実) 2006年	2	150-250 <sup>SG</sup>	3	7	<0.02	<0.02								
			3	14	<0.02	<0.02								
うめ (果実) 2001年	2	400~620 <sup>SP</sup> ×3	3	7	1.15	1.02								
			3	14	1.10	0.62								
			3	21	0.62	0.44								
			3	28	0.61	0.31								
うめ (果実) 2006年	2	400~560 <sup>SP</sup> ×3	3	1	1.38	1.32								
			3	3	1.05	1.02								
			3	7	0.88	0.86								
			3	14	0.67	0.66								
うめ* (果実) 2000年	2	200-300 <sup>SG</sup>	2	7	0.190	0.134								
			2	14	0.185	0.140								
			2	21	0.245	0.121								
おうとう (果実) 2003年	2	400~500 <sup>SP</sup> ×2	2	1	1.97	1.25								
			2	3	1.52	1.14								
			2	7	1.27	1.00								
			2	14	1.03	0.72								
おうとう* (果実) 2003年	2	250 <sup>SG</sup>	2	1	0.08	0.06*								
			2	3	0.10	0.06*								
			2	7	0.13	0.09*								
			2	14	0.14	0.10								
いちご (果実) 2003年	1	0.01 g ai/株 <sup>G</sup>	1	97	0.23	0.22								
			1	104	0.21	0.20								
いちご (果実) 2003年	1	0.01 g ai/株 <sup>G</sup>	1	62	0.07	0.06								
			1	69	0.04	0.04*								
いちご* (果実) 2000年	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup>	1	92	<0.005	<0.005								
			1	99	<0.005	<0.005								
			1	106	<0.005	<0.005								
			1	115	<0.005	<0.005								
			1	125	<0.005	<0.005								
			1	132	<0.005	<0.005								
			1	139	<0.005	<0.005								
	2	0.01g ai/株 <sup>G</sup> 100-125 <sup>SG</sup>	4 <sup>a</sup>	1	0.010	0.008*								
ブルーベリー (果実) 2008年	2	240 <sup>SP</sup> ×3	3	1 <sup>a</sup>	0.15	0.15								
			3	7 <sup>a</sup>	0.10	0.10								
			3	14 <sup>a</sup>	0.07	0.07								
			3	28 <sup>a</sup>	0.09	0.09								
			3	42	0.02	0.02								

作物名 実施年	試験 ほ場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
ぶどう (果実) 1998年	2	240 <sup>SP</sup> ×3	3	14	1.23	1.18	0.026	0.013	0.024	0.018	0.040	0.020	0.009	0.005
			3	28	1.43	1.43	0.053	0.027	0.051	0.028	0.066	0.036	0.011	0.007
			3	42	1.42	1.37	0.105	0.049	0.041	0.027	0.113	0.062	0.017	0.009
			3	56	0.385	0.380	0.042	0.021	0.029	0.019	0.055	0.026	0.016	0.008*
ぶどう (果実) 2006年	2	240~320 <sup>SP</sup> ×3	3	1	1.01	1.00								
			3	14	0.95	0.94								
			3	28	0.90	0.90								
			3	56	0.21	0.20								
ぶどう* (果実) 2000年	2	150-250 <sup>SG</sup>	2	7	0.074	0.044								
			2	14	0.075	0.062								
			2	21	0.096	0.065								
			2	28	0.126	0.067								
かき (果実) 2002年	2	320~400 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.16	0.11								
			3	13~14	0.11	0.07								
			3	21	0.10	0.07								
かき* (果実) 2000年	2	250 <sup>SG</sup>	3	3	0.016	0.010								
			3	7	0.012	0.010								
			3	14	0.016	0.012								
			3	21	0.019	0.011								
キウイフルー ツ (果実) 2006年	2	240~320 <sup>SP</sup> ×3	3	1	<0.005	<0.005								
			3	3	0.009	0.008								
			3	7	<0.005	<0.005								
			3	14	<0.005	<0.005								
バナナ* (果実) 2005年	2	100 <sup>SG</sup>	3	7	<0.02	<0.02								
			3	14	<0.02	<0.02								
			3	21	<0.02	<0.02								
パパイヤ (果実) 2005年	2	160 <sup>SP</sup> ×3	3	3	0.22	0.16								
			3	7	0.10	0.08								
			3	14	0.07	0.07								
グァバ* (果実) 2005年	2	100-207 <sup>SG</sup>	2	7	<0.02	<0.02								
			2	14	<0.02	<0.02								
			2	21	<0.02	<0.02								
マンゴー (果実) 2004、2005年	2	256 <sup>SP</sup> ×3	3	7	0.06	0.06								
			3	14	0.04	0.04								
			3	21	0.04	0.04								
マンゴー* (果実) 2006年	2	84-150 <sup>SG</sup>	2	14	0.03	0.02								
			2	21	0.04	0.03								
			2	28	0.02	0.02								
アセロラ* (果実) 2005年	2	83-278 <sup>SG</sup>	2	7	0.09	0.06*								
			2	14	0.07	0.06*								
			2	21	<0.04	<0.04								
いちじく (果実) 2004、2005年	2	160-320 <sup>SP</sup> ×3	3	3	0.27	0.17								
			3	7	0.11	0.08								
			3	14	0.07	0.05								
いちじく* (果実) 2003年	2	165-250 <sup>SG</sup>	2	1	0.12	0.09*								
			2	3	0.09	0.09*								
			2	7	0.10	0.10*								
			2	14	<0.1	0.08*								
オリーブ (果実) 2007、2008年	2	400 <sup>SP</sup>	2	1	1.80	1.69								
			2	3	1.52	1.41								
			2	7	1.13	0.78								
茶 (荒茶) 1999、2001年	3	320 <sup>SP</sup>	1	7	38.0	15.8	0.11	0.080	1.21	0.63	0.44	0.24	0.39	0.25
			1	14	7.93	3.66	0.136	0.073	1.03	0.63	0.31	0.15	0.60	0.28
			1	21	3.28	1.30	0.08	0.042*	0.65	0.32	0.21	0.08*	0.70	0.27
茶* (荒茶)	2	100 <sup>SG</sup>	1	7	0.25	0.16								
			1	14	0.11	0.08								
			1	21	0.05	0.05								

作物名 実施年	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回 数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					クロチアニジン		TZNG		TZMU		MNG		TMG	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
1998-2002年	2	100 WDG	1 1 1	7 14 21	0.17 0.11 0.07	0.12 0.08* 0.06								
茶 (浸出液) 1999、2001年	3	320 SP	1 1 1	7 14 21	36.7 8.31 3.19	15.8 3.88 1.32	0.131 0.167 0.092	0.99 0.89 0.42*	0.93 0.95 0.61	0.59 0.66 0.31	0.44 0.33 0.19	0.23 0.16* 0.09*	0.17 0.37 0.32	0.14* 0.21* 0.14*
茶* (浸出液) 1998-2002年	2	100 SG	1 1 1	7 14 21	0.23 0.09 0.05	0.14 0.07 0.05								
	2	100 WDG	1 1 1	7 14 21	0.15 0.10 0.05	0.12 0.08 0.05*								
茶 <sup>a</sup> (荒茶) 2007年	2	480 SP	1 1 1	3 7 14	21.2 18.2 5.22	15.1 11.4 3.37								
飼料用稲 <sup>a</sup> (植物体全体) 2005年	2	72~140 <sup>G</sup> 66~78 <sup>SC</sup> ×3	4 4 4	14 21 26~28	0.55 0.21 0.12	0.54 0.20 0.05								
飼料用稲 <sup>a</sup> (植物体全体) 2005年	2	72~140 <sup>G</sup> 60 <sup>SC</sup> ×3	4 4 4	14 21 26~28	0.38 0.22 0.09	0.38 0.22 0.09								
飼料用とうも ろこし* (青刈り) 2010年	2	1.8 <sup>SC</sup> g ai/kg(種子)	1	83~101	<0.004	<0.004								

注) ai : 有効成分量、PHI : 最終使用から収穫間隔までの日数

D : 粉剤、G : 粒剤、SP : 水溶剤、SG : 顆粒水溶剤、WP : 水和剤、WDG : 顆粒水和剤、SC : フロアブル

- ・作物名に\*を付したものは、チアメトキサムの作物残留試験におけるクロチアニジン残留値を示す。またその場合、使用量は農薬チアメトキサムの使用量を示す。
- ・農薬の作物名、使用量、使用回数及び使用時期 (PHI) が、登録又は申請された使用方法から逸脱している場合は、作物名、使用量、回数又は PHI に<sup>a</sup>を付した。
- ・全データが定量限界未満の平均値を算出する場合は定量限界を平均し、<を付した。
- ・複数の試験機関で、定量限界が異なる場合の最高値は、大きい値を示した (例えば A 機関で 0.006 検出され、B 機関で<0.008 の場合、<0.008 とした)。
- ・一部に定量限界未満 (例えば<0.01) を含むデータの平均値は定量限界 (例えば 0.01) を検出したものとして計算し、\*を付した。



<別紙4：推定摂取量>

作物名	残留値 (mg/kg)	国民平均		小児 (1～6歳)		妊婦		高齢者 (65歳以上)	
		ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)
水稲	0.312	164	51.2	85.7	26.7	105	32.9	180	56.2
トウモロコシ	0.01	4.7	0.0470	5.4	0.0540	6	0.0600	4.3	0.0430
大豆	0.01	39	0.390	20.4	0.204	31.3	0.313	46.1	0.461
小豆	0.075	2.4	0.180	0.8	0.0600	0.8	0.0600	3.9	0.293
ばれいしょ	0.03	38.4	1.15	34	1.02	41.9	1.26	35.1	1.05
さとうきび	0.09	98.2	8.84	83.6	7.52	124	11.2	100	9.02
だいこん (根)	0.01	33	0.330	11.4	0.114	20.6	0.206	45.7	0.457
だいこん (葉)	1.69	1.7	2.87	0.6	1.01	3.1	5.24	2.8	4.73
かぶ類(根)	0.195	2.8	0.546	0.8	0.156	0.1	0.0195	5	0.975
かぶ類(葉)	28.0	0.3	8.39	0.1	2.80	0.1	2.80	0.6	16.8
はくさい	0.953	17.7	16.9	5.1	4.86	16.6	15.8	21.6	20.6
キャベツ	0.132	24.1	3.18	11.6	1.53	19	2.51	23.8	3.14
こまつな	3.90	5	19.5	1.8	7.01	6.4	24.9	6.4	24.9
きょうな	1.89	2.2	4.16	0.4	0.756	1.4	2.65	2.7	5.10
フゲンソイ	0.67	1.8	1.21	0.7	0.469	1.8	1.21	1.9	1.27
ブロッコリー	0.249	5.2	1.29	3.3	0.822	5.5	1.37	5.7	1.42
その他の アブラ科野菜	0.84	3.4	2.86	0.6	0.504	0.8	0.672	4.8	4.03
しゅんぎく	2.19	1.5	3.29	0.3	0.657	2.6	5.69	2.5	5.48
レタス	6.96	9.6	66.8	4.4	30.6	11.4	79.3	9.2	64.0
ねぎ	0.241	9.4	2.27	3.7	0.892	6.8	1.64	10.7	2.58
にら	4.07	2	8.14	0.9	3.66	1.8	7.33	2.1	8.55
アスパラガス	0.164	1.7	0.279	0.7	0.115	1	0.164	2.5	0.410
わけぎ	2.16	0.2	0.432	0.1	0.216	0.1	0.216	0.2	0.432
にんじん	0.01	18.8	0.188	14.1	0.141	22.5	0.225	18.7	0.187
パセリ	7.44	0.1	0.744	0.1	0.744	0.1	0.744	0.2	1.49
セロリ	3.9	1.2	4.68	0.6	2.34	0.3	1.17	1.2	4.68
みつば	10.5	0.4	4.20	0.1	1.05	0.1	1.05	0.5	5.25
トマト	1.07	32.1	34.3	19	20.3	32	34.2	36.6	39.2
ピーマン	1.06	4.8	5.09	2.2	2.33	7.6	8.06	4.9	5.19

作物名	残留値 (mg/kg)	国民平均		小児 (1～6歳)		妊婦		高齢者 (65歳以上)	
		ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)
なす	0.307	12	3.68	2.1	0.645	10	3.07	17.1	5.25
その他の なす科野菜	2.99	1.1	3.29	0.1	0.299	1.2	3.59	1.2	3.59
きゅうり	0.418	20.7	8.65	9.6	4.01	14.2	5.94	25.6	10.7
かぼちゃ	0.08	9.3	0.744	3.7	0.296	7.9	0.632	13	1.04
スイカ	0.016	7.6	0.122	5.5	0.0880	14.4	0.230	11.3	0.181
メロン類	0.032	3.5	0.112	2.7	0.0864	4.4	0.141	4.2	0.134
その他の うり科野菜	0.23	2.7	0.621	1.2	0.276	0.6	0.138	3.4	0.782
ほうれんそ う	27.84	12.8	356	5.9	164	14.2	395	17.4	484
オクラ	0.34	1.4	0.476	1.1	0.374	1.4	0.476	1.7	0.578
未成熟 えんどう	0.86	1.6	1.38	0.5	0.430	0.2	0.172	2.4	2.06
未成熟 いんげん	0.43	2.4	1.03	1.1	0.473	0.1	0.0430	3.2	1.38
えだまめ	0.023	1.7	0.0391	1	0.0230	0.6	0.0138	2.7	0.0621
その他の 野菜	0.43	13.4	5.76	6.3	2.71	10.1	4.34	14.1	6.06
みかん	0.131	17.8	2.33	16.4	2.15	0.6	0.0786	26.2	3.43
なつみかん (果皮)	1.23	0.1	0.123	0.1	0.123	0.1	0.123	0.1	0.123
なつみかん (全果実)	0.45	1.3	0.585	0.7	0.315	4.8	2.16	2.1	0.945
その他の かんきつ	0.357	5.9	2.11	2.7	0.964	2.5	0.893	9.5	3.39
りんご	0.096	24.2	2.32	30.9	2.97	18.8	1.80	32.4	3.11
日本なし	0.26	6.4	1.66	3.4	0.884	9.1	2.37	7.8	2.03
西洋なし	0.26	0.6	0.156	0.2	0.0520	0.1	0.0260	0.5	0.130
もも	0.38	3.4	1.29	3.7	1.41	5.3	2.01	4.4	1.67
初刈り	0.6	0.1	0.0600	0.1	0.0600	0.1	0.0600	0.1	0.0600
あんず	0.82	0.2	0.164	0.1	0.0820	0.1	0.0820	0.4	0.328
すもも	0.05	1.1	0.0550	0.7	0.0350	0.6	0.0300	1.1	0.0550
うめ	1.46	1.4	2.04	0.3	0.438	0.6	0.876	1.8	2.63

作物名	残留値 (mg/kg)	国民平均		小児 (1～6歳)		妊婦		高齢者 (65歳以上)	
		ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μg/人/日)
おうとう	1.34	0.4	0.536	0.7	0.938	0.1	0.134	0.3	0.402
いちご	0.228	5.4	1.23	7.8	1.78	5.2	1.19	5.9	1.35
ブルーベリー	0.15	1.1	0.165	0.7	0.105	0.5	0.0750	1.4	0.210
ぶどう	1.50	8.7	13.0	8.2	12.3	20.2	30.2	9	13.5
かき	0.122	9.9	1.21	1.7	0.207	3.9	0.476	18.2	2.22
キウイ	0.008	2.2	0.0176	1.4	0.0112	2.3	0.0184	2.9	0.0232
パパイヤ	0.16	0.2	0.0320	0.3	0.0480	0.1	0.0160	0.1	0.0160
マンゴー	0.09	0.3	0.0270	0.3	0.0270	0.1	0.0090	0.3	0.0270
その他の 果実	1.79	1.2	2.15	0.4	0.716	0.9	1.61	1.7	3.04
茶	16.0	6.6	105	1	16.0	3.7	59.1	9.4	150
みかんの皮	1.86	0.1	0.186	0.1	0.186	0.1	0.186	0.1	0.186
その他の ハーブ	1.37	0.9	1.23	0.3	0.411	0.1	0.137	1.4	1.92
合計			774		335		761		995

注) ・残留値は、申請されている使用時期・使用回数による各試験区の平均残留値のうち最大のものを用了。

また、クロチアニジンの残留値にチアメトキサム由来のクロチアニジンの残留値を加えた値を用了。(参照別紙3)

- ・ff:平成17～19年の食品摂取頻度・摂取量調査(参照108)の結果に基づく農産物摂取量(μg/人/日)
- ・摂取量:残留値及び農産物摂取量から求めたクロチアニジンの推定摂取量(μg/人/日)
- ・さといも、かんしょ、やまいも、こんにゃく、てんさい、さとうきび、バナナ及びグアバについては、全データが定量限界未満であったため摂取量の計算はしていない。
- ・小豆については、小豆、いんげんまめのうち、残留値の最も高い小豆の値を用了。
- ・きょうなについては、みずなの値を用了。
- ・その他のアブラ科野菜については、はなっこりの値を用了。
- ・レタスについては、レタス、リーフレタス及びサラダ菜のうち、残留値の最も高いサラダ菜の値を用了。
- ・トマトについては、トマト及びミニトマトのうち、残留値の最も高いミニトマトの値を用了。
- ・その他のなす科野菜については、ししとう及びとうがらしのうち、残留値の最も高いししとうの値を用了。
- ・その他のうり科野菜については、とうがん、にがうり及び食用へちまのうち、残留値の最も高いにがうりの値を用了。
- ・その他の野菜については、れんこん、みょうが、エンサイ、うこぎ及びモロヘイヤのうち、残留値の最も高いモロヘイヤの値を用了。
- ・その他のかんきつについては、すだち、かぼす及びゆずのうち、残留値もつもの高いすだちの値を用了。

- ・その他の果実については、アセロラ、いちじく及びオリーブのうち、残留値の最も高いオリーブの値を用いた。
- ・その他のハーブについては、セージ及びあさつきのうち、残留値の最も高いあさつきの値を用いた。

<参照>

- 1 農薬抄録クロチアニジン（殺虫剤）（平成 16 年 9 月 14 日改訂）：住化武田農薬株式会社、2004 年、一部公表
- 2 クロチアニジンのラットにおける吸収、分布及び排泄性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 3 クロチアニジンのラットにおける代謝試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 4 クロチアニジンの安全性評価資料の追加提出について：住化武田農薬株式会社、2001 年、未公表
- 5 クロチアニジンのイネにおける代謝分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 6 クロチアニジンのトマトにおける代謝分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 7 クロチアニジンのチャにおける代謝分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 8 クロチアニジンの土壌中における分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 9 クロチアニジンの土壌表面における光分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 10 クロチアニジンの土壌中における吸着性及び移行性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 11 クロチアニジンの加水分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 12 クロチアニジンの水中光分解性試験：武田薬品工業株式会社、2000 年、未公表
- 13 土壌残留性試験水田状態圃場試験：武田薬品工業株式会社、1999 年、未公表
- 14 土壌残留性試験水田状態圃場試験：武田薬品工業株式会社、2001 年、未公表
- 15 土壌残留性試験畑地状態圃場試験：武田薬品工業株式会社、1999～2000 年、未公表
- 16 土壌残留性試験水田状態容器内試験：武田薬品工業株式会社、1999 年、未公表
- 17 土壌残留性試験水田状態容器内試験：武田薬品工業株式会社、2001 年、未公表
- 18 土壌残留性試験畑地状態容器内試験：武田薬品工業株式会社、1999～2000 年、未公表
- 19 クロチアニジンの作物残留試験成績：日本食品分析センター、2004 年、未公表
- 20 クロチアニジンの作物残留試験成績：武田薬品工業株式会社、2004 年、未公表
- 21 クロチアニジンの乳汁への移行分析試験：武田薬品工業株式会社、2002 年、未公表
- 22 クロチアニジンにおける薬理試験（GLP 対応）：（株）三菱化学安全科学研究所、2000 年、未公表
- 23 クロチアニジンのラットを用いた急性経口毒性試験（GLP 対応）：Covance Laboratories（英国）、1997 年、未公表
- 24 クロチアニジンのマウスを用いた急性経口毒性試験（GLP 対応）：Covance Laboratories（英国）、1997 年、未公表
- 25 クロチアニジンのラットを用いた急性経皮毒性試験（GLP 対応）：Covance Laboratories（英国）、1997 年、未公表
- 26 クロチアニジンのラットを用いた急性吸入毒性試験（GLP 対応）：Covance Laboratories（英国）、1998 年、未公表
- 27 TZNG のラットを用いた急性経口毒性試験（GLP 対応）：Covance Laboratories（英国）、

- 1999年、未公表
- 28 TZMU のラットを用いた急性経口毒性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999年、未公表
- 29 TMG のラットを用いた急性経口毒性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999年、未公表
- 30 MG のラットを用いた急性経口毒性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999年、未公表
- 31 MAI のラットを用いた急性経口毒性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999年、未公表
- 32 クロチアニジンのラットを用いた急性神経毒性試験 (GLP 対応) : Bayer Corporation (米国)、2000年、未公表
- 33 クロチアニジンのラットを用いた急性神経毒性試験 (追加試験) (GLP 対応) : Bayer Corporation (米国)、2000年、未公表
- 34 クロチアニジンのウサギを用いた眼一次刺激性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1997年、未公表
- 35 クロチアニジンのウサギを用いた皮膚一次刺激性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1997年、未公表
- 36 クロチアニジンのモルモットにおける皮膚感作性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1997年、未公表
- 37 クロチアニジンのラットを用いた3ヶ月混餌投与亜急性毒性試験 (GLP 対応) : Bayer Corporation (米国)、2000年、未公表
- 38 クロチアニジンの安全性評価資料の追加提出について : 住化武田農薬株式会社、2001年、未公表
- 39 クロチアニジンのイヌを用いた3ヶ月間混餌投与亜急性毒性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories, Vienna (米国)、2000年、未公表
- 40 クロチアニジンのラットを用いた90日間反復経口投与神経毒性試験 (GLP 対応) : Bayer Corporation、2000年、未公表
- 41 クロチアニジンのイヌを用いた12ヶ月間混餌投与による慢性毒性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories, Vienna (米国)、2000年、未公表
- 42 クロチアニジンのラットを用いた24ヶ月間混餌投与による慢性毒性・発がん性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories, Madison (米国)、2000年、未公表
- 43 クロチアニジンのマウスを用いた18ヶ月間混餌投与による発がん性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories, Madison (米国)、2000年、未公表
- 44 クロチアニジンのラットを用いた2世代繁殖試験 (GLP 対応) : Bayer Corporation (米国)、2000年、未公表
- 45 クロチアニジンのラットにおける催奇形性試験 (GLP 対応) : Argus Research Laboratories (米国)、1998年、未公表
- 46 クロチアニジンのウサギにおける催奇形性試験 (GLP 対応) : Argus Research Laboratories (米国)、1998年、未公表

- 47 クロチアニジンの細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Bayer AG (独国) 1999 年、未公表
- 48 クロチアニジンのチャイニーズハムスター肺由来細胞 (V79) を用いた HPRT 遺伝子座突然変異試験 (V79-HPRT 試験) (GLP 対応) : Bayer AG (独国)、1999 年、未公表
- 49 クロチアニジンのチャイニーズハムスター肺 CHL 細胞を用いた *in vitro* 染色体異常試験 (GLP 対応) : Safeparm Laboratories (英国)、2000 年、未公表
- 50 クロチアニジンのマウスを用いた *in vivo* 染色体異常試験 (GLP 対応) : Safeparm Laboratories (英国)、2000 年、未公表
- 51 クロチアニジンのラット肝細胞を用いた *in vivo* 不定期 DNA 合成(UDS)試験 (GLP 対応) : Bayer AG (独国)、1999 年、未公表
- 52 TZNG の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999 年、未公表
- 53 TZMU の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999 年、未公表
- 54 TMG の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999 年、未公表
- 55 MG の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999 年、未公表
- 56 MAI の細菌を用いた復帰変異性試験 (GLP 対応) : Covance Laboratories (英国)、1999 年、未公表
- 57 食品健康影響評価について (平成 16 年 10 月 5 日付け厚生労働省発食安第 1005002 号)
- 58 食品健康影響評価の結果の通知について (平成 17 年 1 月 27 日付け府食第 90 号)
- 59 食品、添加物等の規格基準 (昭和 34 年厚生省告示第 370 号) の一部を改正する件 (平成 17 年 10 月 25 日付け平成 17 年厚生労働省告示第 470 号)
- 60 農薬抄録クロチアニジン (殺虫剤) 改訂版 : 住化武田農薬株式会社、2005 年、一部公表
- 61 クロチアニジンの作物残留性試験成績 : 住化武田農薬株式会社、2004~2005 年、未公表
- 62 食品健康影響評価について (平成 17 年 10 月 4 日付け厚生労働省発食安第 1004001 号)
- 63 食品、添加物等の規格基準 (昭和 34 年厚生労働省告示第 370 号) の一部を改正する件 (平成 17 年 11 月 29 日付け平成 17 年厚生労働省告示第 499 号)
- 64 食品健康影響評価について (平成 18 年 7 月 18 日付け厚生労働省発食安第 0718028 号)
- 65 食品健康影響評価の結果の通知について (平成 18 年 12 月 7 日付け府食第 987 号)
- 66 食品、添加物等の規格基準 (昭和 34 年厚生省告示第 370 号) の一部を改正する件 (平成 19 年 5 月 31 日付け平成 19 年厚生労働省告示第 206 号)
- 67 農薬抄録クロチアニジン (殺虫剤) 改訂版 : 住化武田農薬株式会社、2008 年、一部公表
- 68 食品健康影響評価について (平成 20 年 1 月 11 日付け厚生労働省発食安第 0111003 号)
- 69 食品健康影響評価の結果の通知について (平成 20 年 2 月 28 日付け府食第 218 号)
- 70 食品、添加物等の規格基準 (昭和 34 年厚生省告示第 370 号) の一部を改正する件 (平成 21 年 7 月 2 日付け平成 21 年厚生労働省告示第 346 号)
- 71 農薬抄録クロチアニジン (殺虫剤) 改訂版 : 住化武田農薬株式会社、2010 年、一部公表

- 72 Ames 試験 (GLP 対応) : Safepharma、2000 年、未公表
- 73 TA1535 株の Ames 試験 (GLP 対応)、BayerAG、1991 年、未公表
- 74 V79/HPRT 試験 (GLP 対応)、RCC、1991 年、未公表
- 75 V79/TK 試験 (GLP 対応)、RCC、1991 年、未公表
- 76 染色体異常試験 (GLP 対応)、RCC、2003 年、未公表
- 77 小核試験 (GLP 対応)、RCC、2003 年、未公表
- 78 UDS 試験 (GLP 対応)、RCC、2003 年、未公表
- 79 発達神経毒性試験 (GLP 対応)、Argus、2000 年、未公表
- 80 免疫毒性試験 (GLP 対応)、CR-DDS、2004 年、未公表
- 81 発達免疫毒性試験 (GLP 対応)、Charles River、2008 年、未公表
- 82 代謝物(ATMG-Pyr) ;ラット急性経口 (GLP 対応)、CovanceUK、2000 年、未公表
- 83 代謝物(ATMG-Pyr) ;Ames 試験 (GLP 対応)、CovanceUK、2000 年、未公表
- 84 代謝物(ATG-Ac) ;ラット急性経口 (GLP 対応)、CovanceUK、2000 年、未公表
- 85 代謝物(ATG-Ac) ;Ames 試験 (GLP 対応)、CovanceUK、2000 年、未公表
- 86 ラット動物代謝試験 (GLP 対応)、BayerAG、2000 年、未公表
- 87 マウス動物代謝試験、武田薬品工業、2000 年、未公表
- 88 乳牛を用いた家畜残留試験 (GLP 対応)、BayerAG、2001 年、未公表
- 89 ヤギを用いた家畜代謝試験 (GLP 対応)、BayerAG、2000 年、未公表
- 90 鶏を用いた家畜代謝試験 (GLP 対応)、BayerAG、2000 年、未公表
- 91 リンゴ (果実) を用いた植物代謝試験 (GLP 対応)、BayerAG、1999 年、未公表
- 92 リンゴ (葉) を用いた植物代謝試験 (GLP 対応)、BayerAG、1999 年、未公表
- 93 てんさいを用いた植物代謝試験 (GLP 対応)、HuntingdonLifeSciences、2000 年、未公表
- 94 [ニトロイミノ-<sup>14</sup>C]クロチアニジン:とうもろこしを用いた植物代謝試験、BayerAG、2000 年、未公表
- 95 [チアゾール-2-<sup>14</sup>C]クロチアニジン:とうもろこしを用いた植物代謝試験、BayerAG、2000 年、未公表
- 96 クロチアニジンの作物残留試験 (さやいんげん、他)、住友化学、2000 年、未公表
- 97 食品健康影響評価について (平成 23 年 6 月 8 日付け厚生労働省発食安 0608 第 2 号)
- 98 チアメトキサム (殺虫剤) 改訂版:シンジェンタ ジャパン株式会社、2010 年、一部公表予定
- 99 食品健康影響評価の結果の通知について (平成 24 年 3 月 1 日付け府食第 224 号)
- 100 食品健康影響評価について (平成 25 年 11 月 11 日付け厚生労働省発食安 1111 第 3 号)
- 101 農薬抄録クロチアニジン (殺虫剤) (平成 22 年 4 月 23 日改訂):住友化学株式会社、2010 年、一部公表
- 102 クロチアニジンの作物残留試験成績:住友化学株式会社、2010~2011 年、未公表
- 103 食品健康影響評価の結果の通知について (平成 26 年 1 月 20 日付け府食第 64 号)
- 104 食品健康影響評価について (平成 26 年 4 月 7 日付け厚生労働省発食安 0407 第 1 号)
- 105 農薬抄録クロチアニジン (殺虫剤) (平成 26 年 3 月 19 日改訂):住化武田農薬株式会社、



2014年、一部公表予定

- 106 Tanaka T: Effects of maternal clothianidin exposure on behavioral development in F<sub>1</sub>-generation mice. *Toxicol Ind Health* 2011; 1-11.
- 107 Tanaka T: Reproductive and Neurobehavioral Effects of Clothianidin Administered to Mice in the Diet. *Birth Defects Research (Part B)* 2012; 95 : 151-159.
- 108 平成 17～19 年の食品摂取頻度・摂取量調査（薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会農薬・動物用医薬品部会資料、2014 年 2 月 20 日）